

シリアにおけるクルド問題 “ 度化 ”

差別・抑圧の “ 制

著者	青山 弘之
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	46
号	8
ページ	42-70
発行年	2005-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/261

シリアにおけるクルド問題

差別・抑圧の“制度化”

あお やま ひろ ゆき
青 山 弘 之

はじめに

クルド人とは誰か？
社会的亀裂と恣意的差別の発生
クルド問題の発生と深刻化
むすび

はじめに

2004年3月12日、シリア北東部のトルコ国境沿いに位置するカーミシュリー市でクルド人による民衆暴動が発生した。同市で予定されていた地元サッカー・チームとデイル・ゾール県所属のチームとの対戦直前に起きた、両チーム・サポーター（地元のクルド系住民とデイル・ゾール県から訪れたアラブ系住民）のスタジアム内での衝突に端を発したこの暴動は、まもなく市全土に拡大、暴徒化した民衆に警察・治安部隊が無差別発砲を行うにいたり、事態は争乱の様相を呈した。また事件発生を受け、ハサカ市、アフリーン市、アイン・アル＝アラブ市、ダマスカス市、アレppo市などで、クルド系住民が連日のようにゼネストやデモを組織し、カーミシュリー市での暴動の真相究明を政府に要求するとともに、クルド人に対する差別の撤廃を訴えた。

「カーミシュリー事件〔aḥdāth al-qāmishī〕^{注1)}」と称されたこの一連の暴動・抗議行動は、警

察・治安部隊の弾圧によって同月18日までに収束した。だがこの一件で30人以上が死亡、約130人が負傷し、約1700人の市民が逮捕された^{注2)}。

9・11事件（2001年）以降、ドラスティックな変化を遂げる国際情勢・地域情勢のなかにおいて、カーミシュリー事件はサッダーム・フサイン（Ṣaddām Ḥusayn、以下フセイン）政権崩壊（2003年4月）後のイラクでのクルド人の政治的台頭が追い風となって発生したとも解釈できる^{注3)}。だが同時にこの事件は、シリアの政治史、とりわけバッシュール・アサド（Bashshār al-Asad）政権（2000年7月発足）の支配において、2つの点で新たな政治的現象と認識し得るものであった。第1に、既存の政治体制・支配体制に対する不満の表明や異議申し立てが、シリアの反政府運動を主導してきた政党・政治組織、文化会議（muntadā thaqāfīya）^{注4)}、人権擁護団体といった政治的アクターではなく、政治的受動分子であるところの一般民衆によってなされた点である。第2に、これまでシリアにおいて主要な政治的争点とならなかったクルド系住民に対する迫害が内政上の懸案事項として提起された点である。

こうした新たな事態を踏まえ、本稿は、シリアにおけるクルド人の政治運動を把握するため

の第一歩として、彼らの民族性に起因する社会的亀裂 (cleavages) がいかなる政治的環境のもとで顕在化し、「国家が支援・容認する差別」[Human Rights Watch 1996, 30]として“制度化”したのかを論じる。社会的亀裂とは、国内の政治対立における区分軸を意味し、地域、言語、民族、宗教・宗派、階級などといった社会成員の属性の差異や多様性によって生じる。この概念は、西欧諸国の社会構造と政党制の関係を解明するために Lipset and Rokkan (1967) によってまず提起され、その後、非西欧諸国の政治体制に関する研究にも適用されるようになった。本稿はシリアにおける社会的亀裂と政治体制の関係そのものを題材とするものではないが、こうした亀裂論の発展の経緯を踏まえ、シリア社会に内在する亀裂が同国の政治体制のもとでいかに“制度的”差別として固定化していったのかを描き出すことをめざす。

以下第 節では、先行研究に依拠してクルド人がいかなる集団なのかをまず簡単に述べ、次にシリアにおけるクルド人の人口、居住地域などを概観する。第 節では、フランス委任統治が開始された1920年から分離クーデタが発生した1961年までの時期に焦点を当て、クルド人の民族性がシリアにおいていかに社会的亀裂と恣意的差別を生み出していったのかを見る。次に第 節で、分離政権 (1961年9月～1963年3月) とアラブ社会主義バース党 (Ḥizb al-Baʿth al-ʿArabī al-Ishtirākī) 政権 (1963年3月～) が実施した政策のうち、社会的亀裂と恣意的差別の“制度化”を決定づけた施策・措置を精査し、クルド問題の所在を明らかにする。最後に、独立以降のシリアにおける政治的対立と社会的亀裂の関係や、クルド人による政治運動のありよ

うに着目し、クルド問題が同国内政において副次的な懸案として放置されてきた原因の一端を探ることとする。

なお、「クルド(人)問題」(Kurdish question/issue, アラビア語で al-masʾala/al-qaḍīya al-kurdiya) ということばは一般的に、トルコ、イラク、イランといった国々におけるクルド民族主義運動の展開と、それによってもたらされる差別・抑圧を示す。だが筆者がシリアの政治的文脈のなかで「クルド問題」という場合、それは単にクルド人の民族性に起因する社会的亀裂や恣意的差別を意味するのではなく、“合法的”な制度、政策、法律のもとで行われる体系的な差別・抑圧を指すものとする。

クルド人とは誰か？

クルド問題を論じるにあたって最初に明示しておかねばならないのは、同問題において差別・抑圧の対象とされているクルド人がどのような人々・集団なのかという点であろう。そこで本節では、先行研究において提示されているクルド人、ないしはクルド民族の定義を整理する。そのうえで、本稿の研究対象地域であるシリアに着目し、そこで暮らす彼らの現状を概観する。

1. クルド民族の定義

クルド人は、トルコ南東部、イラン西部、イラク北東部、シリア北部にまたがる約50万平方キロメートルの地域、すなわちクルディスタン (Kurdistan, 「クルド人のくに」の意味)^{注5)} と称される地域に多く暮らしており、人口は推計で2500万人から2800万人 [Gunter 2004, xxv], 「世界最大のマイノリティ・グループの1つ」

[Thornberry 1989, 195] に数え上げられる。

クルド民族主義運動やクルド問題については、アカデミア、ジャーナリズム、そして人権擁護の立場などから数多くの書籍・報告書・論文が公刊・発表されている。そしてそこでのクルド人の定義は2つの点でほぼ共通している。

第1に、言語、人種の起源、居住地域、そして民族意識などといった客観的、ないしは主観的指標をもって、クルド人の民族性を描き出すとする点である。例えば Arfa (1966, 1) は、クルド語を構成するさまざまな方言^(注6)のいずれかを話し、クルド人であるという感情を持ち、アリア系のメディア人とイラン北部の山岳地帯で暮らしていた在来のグチウム族との混血を祖先とする、という共通性をもって、クルド民族を定義している。また McDowall (2000, 2-3, 13) も、共通の祖先を持つという(架空の)意識に根ざす部族性と、クルド語の存在が、クルド人に一体性を与える主要な要素だと述べている。

第2に、クルド民族の定義に際して提起されるこれらの指標の曖昧さを認め、そのことがクルド人の統合を阻害してきたとする点である。例えば McDowall (2000, 3, 9-13) は、クルディスタンの範囲がクルド人においてさえも厳密に規定されていない点、クルド語の方言どうしの差異が著しく、その表記もローマ文字、アラビア文字、キリル文字と多様である点、そしてイスラーム教スンナ派がマジョリティを占めるものの、ヤズィーディー派、アレヴィー(アラウィー)派、キリスト教徒、ユダヤ教徒などもいる点を上げ、これらが「クルド人の一体性への疑問を暗に投げかける」[McDowall 2000, 3] としている。

クルド人の民族性をめぐるこのような相矛盾した2つの視点の存在が、民族論の問題設定そのものに起因していることは言うまでもない。なぜなら、ある集団を民族として定義する際、他のすべての集団(民族)にも適用し得るような一般的な指標を提示しようとする民族論的アプローチにはそもそも限界があり、民族を自称する(ないしは民族とみなされる)集団の民族性は、それぞれが異なった独自の指標の組み合わせをもって与えられるからである。そしてある集団が民族性を顕現し、国家(国民国家)、ないしはそれに準じるような政治的・文化的自治を志向する過程は、その集団(民族)が身を置く政治的環境と、そこでの他集団との関係に注目することで初めて明らかになるのである。

このことはクルド人においても例外ではなく、その民族性が社会的亀裂を生み出し、差別・抑圧をもたらす要因は、彼ら自身が暮らす近代国家(トルコ、イラク、イラン、シリアなど)の政治体制と、そこでの他の社会的集団との政治的関係のなかにある。

2. シリアにおけるクルド人

シリアは多種多様な宗教・宗派集団、民族・エスニック集団が共存する“モザイク社会”である。同国ではスンナ派のアラブ人がマジョリティを占めてはいるが、その他にも、イスラーム教のアラウィー派、ドゥルーズ派、イスマリーイー派、キリスト教のギリシャ正教徒、ギリシャ・カトリック、シリア正教徒、シリア・カトリック、マロン派、ネストリウス派、カルディア・カトリック、ローマ・カトリック、プロテスタントといった宗教・宗派集団、そしてクルド人、アルメニア人(アルメニア正教徒、アルメニア・カトリック)、コーカサス人、ユ

表1 シリアの主要な宗教・宗派集団、民族・エスニック集団の人口比（推計）

民族・エスニック集団 / 宗教・宗派集団		割合（パーセント）
宗教・宗派集団	イスラーム教徒	92.31
	スンナ派	76.31
	アラウィー派	12.50
	ドゥルーズ派	3.17
	イスマーイーリー派	0.33
	キリスト教徒	7.66
	ギリシャ正教徒	2.67
	ギリシャ・カトリック	1.33
	シリア正教徒	1.17
	シリア・カトリック	0.37
	アルメニア教徒	1.50
	マロン派	0.25
	ネストリウス派	0.13
	カルディア・カトリック	0.08
ローマ・カトリック	0.08	
プロテスタント	0.08	
	ユダヤ教徒	0.03
民族・エスニック集団	アラブ人	90.22
	クルド人	8.00
	アルメニア人（アルメニア教徒）	1.50
	コーカサス人	0.25
	ユダヤ人（ユダヤ教徒）	0.03

（出所）Middle East Watch（1991，90）をもとに筆者作成。

ダヤ人（ユダヤ教徒）といった民族・エスニック集団が暮らしている（これらの集団の人口比については表1を参照）。

このうちクルド人は、シリアにおいて民族・エスニック集団別の人口が調査・公表されておらず^{注7)}、また後述するように、同国で生まれ育ったにもかかわらず国籍を剥奪された人々が多数存在するため、正確な数を把握できない。だが Human Rights Watch（1996，10），al-Maḥmūd（2003），McDowall（1992，121；2000，466），Nazdar（1980，211）^{注8)}などによると、彼らはシリアの全人口の8パーセントから11パーセントを構成すると考えられる。2003年のシリアの人口が1939万6000人 [*al-Majmū'a al-Iḥṣā'īya*

2003，33] であるから、現在同国には推計で約155万人から213万人のクルド人が暮らしていることになる。この数は、シリアを構成する民族・エスニック集団のなかではアラブ人（90.22パーセント）に次いでおり、宗教・宗派集団と比較しても、スンナ派（76.31パーセント）、アラウィー派（12.50パーセント）に次ぐ規模である。彼らの多くはベフディーナーニー（Behdīnānī）方言（北クルマーンジー [Kurmançî] 方言）を話し [Commins 1996，139]、スンナ派に属している^{注9)}。

Gunter（2004，105），Jam'īya Ḥuqūq al-Insān fī Sūriya（2003，5），Mannā'（2004，6），McDowall（2000，466-467），Nazdar（1980，211-

213) などによると、シリアのクルド人は主に以下の地域に集住している。

クルド・ダー (Kurd Dağ, トルコ語で「クルド山」の意味, アラビア語でジャバル・アル=アクラード [Jabal al-Akrād]) 周辺: トルコのハタイ県に隣接する山岳地帯で、アレppo県のアフリーン地方, ジャバル・サムアーン地方, アアザズ地方からなる。中心都市はアフリーン市で、約360の市・村があり、約60万人が暮らす。

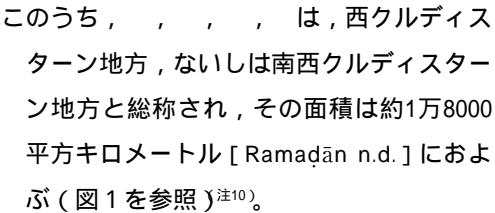
アル=ジャズィーラ (al-Jazīra, チグリス・ユーフラテス両川に挟まれたシリア領内の地域の通称, アラビア語で「島」の意味) 北西部: アレppo県のアイン・アル=アラブ地方, ジャラーブルス地方を包摂する地域。アイン・アル=アラブ市, ジャラーブルス市など約120の市・村があり、約11万人が暮らす。

アル=ジャズィーラ北部: ハサカ県のカーミシュリー地方, ラアス・アル=アイン地方, アル=マーリキーヤ地方を包摂する地域。カーミシュリー市, アームーダ市, ダルバースィーヤ市, ラアス・アル=アイン市, ダイリーク市, アル=マーリキーヤ市など約700の市・村があり、約68万人が暮らす。

アル=ジャズィーラ南部: ハサカ市を中心とする地域で、約2万人が暮らす。

ダマスカス市およびその郊外: アル=アクラード地区, アッ=サーリヒーヤ地区などに約6万人が暮らす。また Abbūd(2004)によると、1980年代にダマスカス市に隣接するダウンマル市近郊のワーディー・アル=マシャリーウに「ゾール・アーヴァ

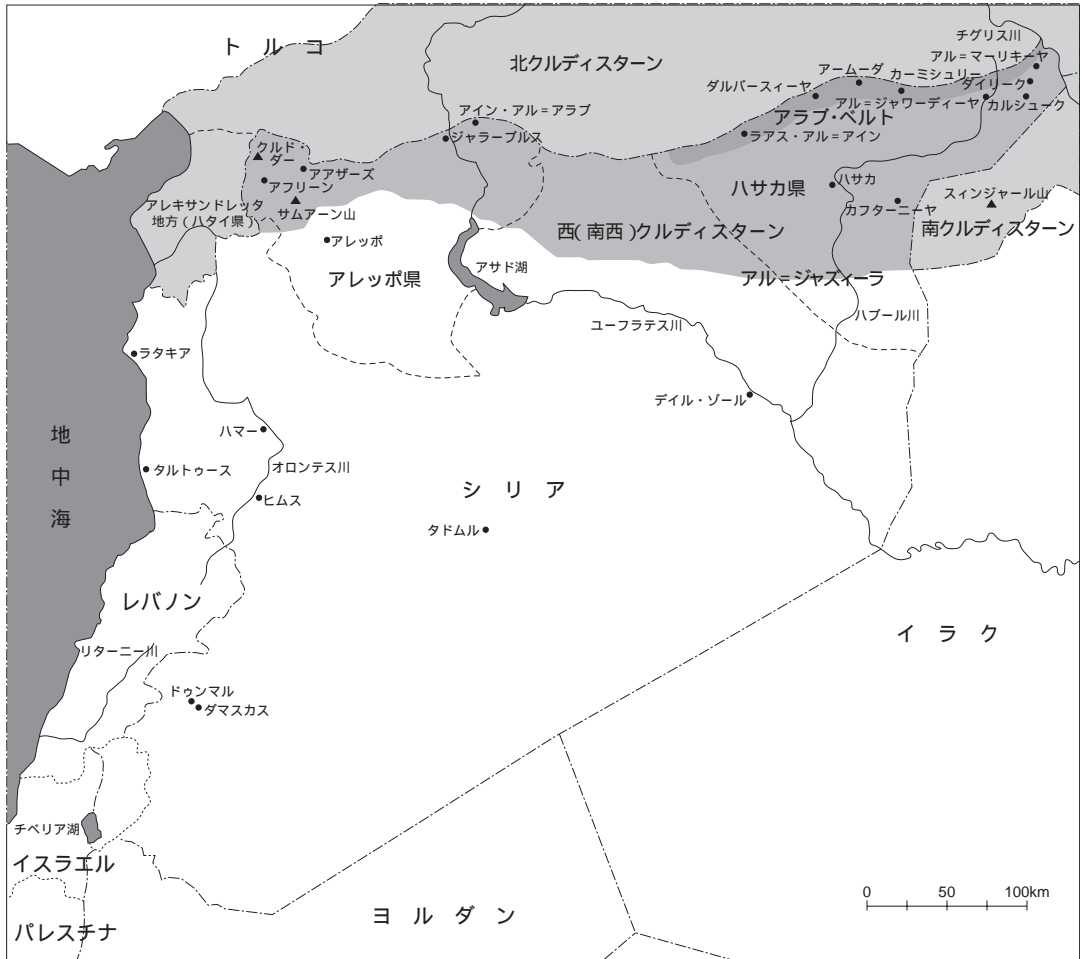
ー」(Zor Ava, クルド語で「たくさん水」の意味)と呼ばれる不法占拠地区が形成され、2万人近くのクルド人が暮らしている。その他: アレppo市, ハマー市, ラタキア市などに約8万人が暮らす。

このうち、 は、西クルディスタン地方、ないしは南西クルディスタン地方と総称され、その面積は約1万8000平方キロメートル [Ramaḍān n.d.] におよぶ (図1を参照) 注10)。

クルド人の民族的指標の曖昧さが指摘されていることから容易に見当がつくように、以上のように描き出されるシリアのクルド人コミュニティは決して一元的ではなく、それ自体が、階級、宗教・宗派、地縁、血縁、イデオロギー・政治理念などに起因するさまざまな社会的亀裂を内包している。またシリアにおけるクルド問題も、クルド人のマイノリティとしてのありようが同国の政治的環境によって規定されているため、トルコ、イラク、イランと内容を異にしている。しかしこうした特殊性が先行研究において強調されることはほとんどなく、シリアのクルド人に関する記述は主に2つのアプローチに限定されてきた。

第1のアプローチは、トルコやイラクにおけるクルド人の政治運動や政権との関係を論じるなかで、シリアのクルド人について言及するというものである。シリアを拠点としたクルディスタン労働者党 (Partiya Karkeren Kurdistan, 略称PKK) の対トルコ武装闘争に注目し、PKKをめぐるシリア・トルコ両国政府の綱引きや、シリアのクルド人に対するPKKの立場などについて触れた Bulloch and Morris (1992, 183-185, 211-215, 234), Ciment (1996, 129-130,

図1 西(南西)クルディスタン



(出所) Badrkhan (2003), シリア・クルド・イエキーティー党ホームページ (<http://www.yekiti.de/kurdistan.htm>, 2003年3月閲覧) より筆者作成。

201), Gunter (1990, 71-122; 1992, 33-36, 49-57, 109-113; 1997, 92-94), Olson (2001, 105-124) などがその代表である。

第2のアプローチは、トルコ、イラク、イランのクルド問題の解説・分析に多くの紙面を割き、シリア(さらにはレバノン、旧ソ連)のクルド人の実情を補足的にしか取り上げないものである。その典型として Thornberry (1989, 195-202) があり、そこでは「今日のシリアにおけるクルド人は数千人が市民権を剥奪されて

いる...(中略)...にもかかわらず、その状況は隣国[トルコ、イラク、イランなど][]内は筆者による。以下同じ)よりも安定している」[Thornberry 1989, 202]といった楽観的な評価が下されている。

こうした事情ゆえ、シリアのクルド問題に関する情報は断片的にしか提供されてこなかった。そこで以下各節では、シリアにおいてクルド問題が発生・深刻化した経緯とその具体的な内容を詳しく見る。

社会的亀裂と恣意的差別の発生

本節では、クルド人の民族性がシリアにおいていかに社会的亀裂と恣意的差別を誘発したのかを詳しく見る。シリアは1946年4月17日に完全独立を果たしたが、クルド人の民族性は、同国の政治的・社会的構成が確定したフランス委任統治時代（1920～1946年）に顕現した。そして独立後約15年間の政治的変化のなかで、彼らに対する差別が徐々に激しさを増していった。そこで以下では、委任統治時代と、独立から分離クーデタ（1961年9月）までの時期に着目し、それぞれの時代・時期におけるクルド人への処遇と彼ら自身の対応を明らかにする。

1. 社会的亀裂の形成（委任統治時代）

シリアにおけるクルド問題の萌芽は、1920年に開始されたフランスの（シリアとレバノンに対する）委任統治支配のもとで形成された。フランスは、レバノンで宗派主義（*tā'ifīya*, *confessionalism*）^{注11}体制を確立したのと同様、シリアにおいても、宗教・宗派、民族・エスニック集団の多様性に着目、その分断を図ることで支配を維持しようとした。そしてその結果、クルド人はシリアの政治空間において異質性を獲得し、その民族性が同国内で社会的亀裂をもたらす一因となっていったのである。

フランスによる宗派主義的支配、ないしは“分割統治”は、シリアにおいてマジョリティを占めるスンナ派・アラブ人を中心とした独立運動の展開と、委任統治体制に脅威をおよぼすような政治勢力の台頭を抑える目的があったと考えられるが、それは主に以下2つの施策を通じて推し進められた。

第1の施策は、レバント特別軍（*les Troupes Spéciales du Levant*）におけるマイノリティの優遇である。フランス委任統治当局は、アラウィー派、ドゥルーズ派、イスマリーイー派、キリスト教徒、コーカサス人とともに、クルド人をレバント特別軍に好んで登用した〔*van Dam* 1979, 39〕^{注12}。そして1925年に発生したアラブ民族主義（*al-qawmīya*）者とドゥルーズ派による反乱（アラブ大反乱）では、アルメニア人、コーカサス人、さらにはウマル・アーガー・シャムディー（*Umar Āghā Shamdīn*, ダマスカス市出身）らクルド人将兵を動員し、その弾圧にあたらせた〔*McDowall* 2000, 468〕。

第2の施策は、マイノリティが多く居住する諸地域への自治権の付与と、委任統治領の分割である。委任統治領シリアにおける行政区画の改編は実に頻繁に行われたが^{注13}、こうした措置はクルド人が多く住むアル＝ジャズィーラにもおよんだ。1920年に同地方をベドウィン管理（*Contrôle Bedouin*）区とし、軍事支配下に置いたフランスは、1932年にその行政単位をリワー（*liwā'*, 地方、トルコ語でサンジャク〔*sancak*〕）に変更したのち、1939年7月に直轄地としたのである〔*Khoury* 1987, 533-534; *Longrigg* 1958, 189; *McDowall* 2000, 470-471〕。

このような支配はクルド人のなかに3つの政治勢力の台頭を促した。

第1に、セープル条約（1920年）におけるクルド民族国家構想とローザンヌ条約（1923年）によるその破棄^{注14}を受けて高揚したクルド民族主義に共鳴し、クルド人の政治的・文化的自治をめざした勢力である。その代表が、1927年にカーミシュリー市でジェラーデト・ベドゥルハーン（*Celadet Bedirxan*）が結成したシリア

初のクルド人政治組織，ホーイブーン（Xoybûn）運動である^{（注15）}。同運動は当初，委任統治当局の支援を受けた。だがまもなく，シリア独立をめざすアラブ民族主義者とシリア国民主義（waṭanīya）者がその分離主義的傾向に反感を抱く一方で，トルコ政府がその反トルコ・キャンペーンに抗議したため，1928年夏に活動停止処分となった〔Badr al-Dīn 2003, 15-16, 159; McDowall 1992, 122; 2000, 468〕。また，1936年にアル＝ジャズィーラを拠点とするヘヴェルキー（Hevêrkî, al-Hifîrkhān）部族のハージョー・アーガー（Haco Axa）とミーツリー（Mîllî, al-Millîya）部族のメフムド・ベイ（Mehmud Bey）がカーミシュリー市長（キリスト教徒）とともに自治権の獲得と委任統治の維持を要求した運動や，1938年9月にハージョー・アーガーを議長とするアル＝ジャズィーラ大会議が自治政府の発足を求めた動きも〔Khoury 1987, 525-534; McDowall 2000, 470-471〕，ホーイブーン運動と同様，クルド民族主義の潮流に位置づけることができる^{（注16）}。

第2に，委任統治支配からの脱却を第一義に据え，アラブ民族主義勢力やシリア国民主義勢力と連携した勢力である。このなかには，反仏・独立抵抗運動を組織・指導した者や，委任統治下で発足した内閣・国会に参画し，フランスとの対話・交渉を通じて独立をめざした者などが含まれる。前者の代表的人物としては，アレppoで反仏闘争を指導したイブラーヒーム・ハナーヌー（Ibrāhīm Hanānū）がいる。後者にはムハンマド・クルド・アリー（Muḥammad Kurd ‘Alī），ムフスィン・バラズィー（Muḥsin al-Barāzī），アブドゥルパーキー・ニザームッディーン（‘Abd al-Bāqī Nizām al-Dīn）ら

がいる。アリーはダマスカス市出身で，1920年9月から1922年6月，1928年2月から1930年10月，そして1931年11月から1932年6月まで教育大臣を務めた。バラズィーはハマー市出身で，1941年4月から9月まで教育大臣を務め，独立後の1948年12月から1949年3月には教育大臣を，1949年6月から8月には首相を務めた。‘A・B・ニザームッディーンはカーミシュリー市出身で，1943年8月に国会議員に選出され，独立後の1953年8月まで同職を務めるとともに，1949年12月から1950年6月と1951年3月から8月には農業大臣を，1955年2月から1956年6月には公共労働通信大臣を，そして1956年6月から12月には保健大臣を務めた。

第3に，マルクス主義に傾倒し，宗教・宗派集団や民族・エスニック集団への帰属を超越しようとした勢力である^{（注17）}。その代表が1924年にペイルートで発足したシリア・レバノン共産党（al-Hizb al-Shuyū‘ī al-Sūrī al-Lubnānī），すなわち現在のシリア共産党（al-Hizb al-Shuyū‘ī al-Sūrī）である。アルメニア人（アルメニア教徒）やクルド人といったマイノリティ民族・宗派が主導的役割を担った同党は，1932年，ダマスカス市出身のクルド人，ハーリド・バクダーシュ（Khālid Bakdāsh）が書記長に就任したのを機に，「伝統的・社会的チャンネル」〔van Dam 1979, 44〕を駆使してクルド人を多く入党させ，1950年代半ばにバース党とともにその頭角を現すことになった〔青山 2003, 85-88; Tachau 1994, 525-527〕^{（注18）}。

このうち第1の勢力は，委任統治下で形成された社会的亀裂に沿ったかたちで活動を展開し，第2，第3の勢力は亀裂の克服をめざした。そしてこうした異なった志向を持つ3つの勢力の

政治への関与のありようが、独立以降のシリアにおいてクルド人に対する恣意的差別を助長していった。

2. 恣意的差別の発生(独立～分離クーデタ)

独立後のシリアでは、委任統治時代の宗派主義的支配は廃され、国民は民族的帰属や宗教・宗派のいかんを問わず、自由に政治に参加できるようになった。しかし委任統治下で強調されたクルド人の民族性に起因する社会的亀裂が解消されることはなく、彼らに対する差別は2つの要因によって徐々に激しさを増していった。

第1の要因は、委任統治時代のマイノリティ優遇政策が、レバント特別軍を改編して創設されたシリア国軍、とりわけクルド人士官の政治への干渉を誘発した点である。後述するように、“伝統的支配階級”(大商人、大地主〔不在地主〕、ブルジョワジー)出身の“保守”勢力が政治の主導権を握った独立後のシリアにおいて、軍はバース党やシリア共産党といった“革新”勢力とともに“被支配階級”(農民、労働者)を代弁する存在として政治に関与していったが^(注19)、こうした動きを主導したのが他ならぬクルド人士官であった。すなわち1940年代末から1950年代初めにかけて、シリアでは“伝統的支配階級”の政治的優位を打破すべく、4度クーデタが実行されたが、その首謀者であるフスニー・ザイーム(Husnī al-Zā'im, 1949年3月のクーデタの首謀者、アレppo市出身)大佐、サーミー・ヒンナーウィー(Sāmī al-Hinnāwī, 1949年8月のクーデタの首謀者、イドリブ市出身)准将、そしてアディーブ・シーシャクリー(Adīb al-Shīshaklī, 1949年11月と1951年11月のクーデタの首謀者、ハマー市出身)大佐は、いずれも「クルドの出自」[van Dam 1979, 42]をもった軍

高官であった^(注20)。クルド人士官の政治への関与は、1954年2月に民政が回復したことで幕を閉じることになった^(注21)。だが、ザイーム、ヒンナーウィー、シーシャクリーのクーデタによってもたらされた政治的不安定は「クルド軍市政権」[McDowall 2000, 471]の結果との批判を浴び、シリア社会内にクルド人への反感を助長していった。

第2の要因は、シリア国内におけるアラブ民族主義の高揚である。この動きは、1952年のエジプト7月革命によるガマル・アブドゥンナーシル(Jamāl ' Abd al-Nāṣir, 以下ナセル)政権の発足を機に一気に加速、1958年2月から1961年9月にかけて、シリアはエジプトと合邦し、アラブ連合共和国を構成するにいたった。そしてアラブ民族統一に向けたこの政治の流れのなかで、クルド人に対する差別が激しさを増していったのである。例えば1950年代半ばには、クルド語のレコードが回収・破棄され、その所有者が逮捕される事件が発生した。またアラブ連合共和国成立直後には、クルド語の出版物が公式に発禁処分となり、さらに1960年11月18日には、アームダ市の映画館が“焼き討ち”にあい、283人(そのほとんどが小学生)が死亡する惨事が起こった[Hurewitz 1969, 153; McDowall 1992, 122; 2000, 471-472; van Dam 1979, 48; *Yekitī* 2000]。

こうした状況は、前述したクルド人の3つの政治勢力のなかのクルド民族主義勢力の台頭を促した^(注22)。彼らはイラクのクルディスタン民主党(al-Hizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdistānī, 英語名 Kurdistan Democratic Party, 略称 KDP)を範として[Nazdar 1980, 215]、独自の民族主義政党、シリア・クルド民主党(al-Hizb al-Dīmuqrāṭī

al-Kurdī fī Sūriyā, クルド語名 Partīya Demokrat ya Kurdī li Sūriyê), 通称アル・パートルティー (Al Partî) を設立し, その存在を誇示するようになったのである^(注23)。

シリア・クルド民主党は, 1957年6月14日に, ヌールッディーン・ザーザー (Nūr al-Dīn Zāzā) 党首, ウスマーン・サブリー (‘ Uthmān Ṣabrī) 書記長, アブドゥルハミード・ダルウィーシュ (‘ Abd al-Hamīd Darwīsh), ハムザ・ヌワイラーン (Ḥamza Nuwayrān) らが元シリア共産党員, 有識者, 労働者, 農民とともに結成したシリア初のクルド民族主義政党である^(注24)。発足当初, 同党はシリア・クルディスタン民主党 (al-Hizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdistānī fī Sūriya) を名乗り, 革命的手段によるクルディスタンの解放, 独立, 統一をめざしていた。だが, 1958年に現在の党名に改称し, この急進的な路線を修正し, クルド人の民族としての承認, 民主的政体の確立, 農業改革, アル=ジャズィーラの開発などを要求するようになった [McDowall 1992, 122; 2000, 477-478; Nazdar 1980, 215]^(注25)。

1959年, アラブ連合共和国のもとで, シリアにおけるすべての政党・政治組織の解体と翼賛的な民族連合 (al-Ittiḥād al-Qawmī, 1957年発足) への糾合が断行され, ナセル政権が権威主義的な性格を強めると, シリア・クルド民主党は大規模な弾圧に曝されていた^(注26)。1960年8月10日^(注27), ザーザー党首, サブリー書記長ら党幹部と党員, そして5000人におよぶ「容疑者」 [McDowall 1992, 122] が逮捕されたのである。

逮捕されたシリア・クルド民主党のメンバーに対して, 当局はクルド民族主義の放棄と党活動への批判を強要し, その結果, ザーザー党首が国家最高治安裁判所での公判で「クルディス

ターンの解放は幻想に過ぎない」 [Ramaḍān n.d.] との証言を余儀なくされた^(注28)。そして1960年12月にはザーザー党首ら14名が禁固1年を, 1961年3月にはサブリー書記長ら15名が禁固1年半を宣告された [Kinnane 1964, 44; Mannā 2004, 7; Ramaḍān n. d.]。

独立当初のシリア内政へのクルド人士官の介入と, 1950年代半ばのアラブ民族主義の高揚は, 委任統治時代に形成された社会的亀裂をクルド人に対する差別へと発展させ, その反動として台頭したクルド民族主義勢力 (シリア・クルド民主党) の弾圧をもたらした。しかしこうした事態は, クルド人の民族性やクルド民族主義そのものに端を発していたというよりはむしろ, 「クルド軍事政権」やナセル政権による権威主義・独裁支配のもとで副次的に生じたと見るべきであろう。事実, この時期のクルド人に対する差別は, 次節で詳しく取り上げる分離政権期およびバアス党政権期とは対照的に, 依然として恣意的・散発的であり, “制度化” されていたとは言い難いのである。

クルド問題の発生と深刻化

本節では, 分離政権期 (1961年9月~1963年3月) とバアス党政権期 (1963年3月~) のシリアに焦点をあて, クルド人に対する差別・抑圧がいかに “制度化” していったのかを見る。その際, シリアのクルド問題の根幹をなす2つの政策, すなわち, 分離政権下の1962年10月にハサカ県で実施された「例外的統計」 (al-iḥṣā’ al-istithnā’ī) と, 1960年代半ばにバアス党政権によって策定された「アラブ・ベルト」 (al-ḥizām al-‘arabī) 構想を精査し, 同問題の所在を

明らかにする。

1. ハサカ県における「例外的統計」

(分離政権時代)

1961年9月27日の分離クーデタによってアラブ連合共和国から離脱したシリアでは、ナセル政権下の権威主義・独裁支配が廃止され、民政が復活した。しかし分離政権の発足に伴うこの政治的变化は、クルド人の処遇を改善する契機とはならず、彼らに対する差別はさらに激化していった。

アラブ連合共和国時代に弾圧を受けたシリア・クルド民主党は、1961年半ばまでに党員全員が釈放されたことで復活を遂げた。そして議会制のもとでの政治参加をめざし、制憲議会選挙において、ザーザー党首とムハンマド・イーサー・マフムード (Muḥammad 'Īsā Maḥmūd) の2名をハサカ県選挙区で擁立した。だが投票日の1961年12月1日、両候補はカーミシュリー市で逮捕され、その当選をはばまれたのである [Kinnane 1964, 44; Mannā '2004, 7]^{注29)}。

分離政権下でのクルド人に対する差別はこうした当局の恣意的な“嫌がらせ”にとどまらなかった。1962年8月23日、ナーズィム・クドスイー (Nāẓim al-Qudsī) 大統領 (1961年9月～1963年3月) とバシール・アズマ (Bashīr al-'Aẓma) 首相 (1962年4月～9月) が1962年法律第93号に署名し、ハサカ県で人口統計の再調査を実施、同県で暮らすクルド人のシリア国籍を一方向的に剥奪することで、彼らに対する差別を“制度化”したのである。

この「例外的統計」は主に2つの要因によってその実施が促されたと考えられる。

第1の要因は、アラブ民族主義に固執せざるを得なかった分離政権の複雑な政治的立場であ

る。分離クーデタは、エジプトによるシリア支配の様相を呈していた合邦に抗するかたちで断行されたものではあったが、アラブ民族主義自体を否定してはいなかった。このことは、1961年11月15日に制定された暫定憲法で、国号が初めて「シリア・アラブ (傍点筆者) 共和国」 (al-jumhūrīya al-arabiya al-sūriya)^{注30)}と定められたことから容易に窺い知ることができよう。しかし、ナセル大統領の人気やアラブ統一への期待が高かった当時のシリアにおいて、アラブ連合共和国時代に制定された農地改革法や国有化法を修正・廃止しようとした分離政権 (とりわけマアルーフ・ダワリービー [Má rūf al-Dawālībī] 内閣 [1961年9月～1962年3月]) は、“反動的”との批判に曝され続けた [Keilany 1980, 212; アジア経済研究所 1980, 81-85]。こうした事態に対処すべく、分離政権はアズマ内閣のもとで社会・経済改革の再開をめざすとともに、クルド人に対する制度的差別を敢行することで、自らがアラブ民族主義の理念に“忠実”であることを誇示し、ナセル政権に対抗しようとしたのである^(注31)。

第2の要因は、ハサカ県における急激な人口増加である。McDowall (2000, 473) によると、ハサカ県の人口は1954年から1961年にかけて24万人から30万5000人へと27.1パーセントも増加した。また1962年7月の予備調査において、同県人口は前年比で11.5パーセント増の34万人を数えるにいたった。この数値は、1954年から1961年にかけてのシリア全体の人口増加率4.3パーセントに比べて突出していた^(注32)。分離政権は、このような急激な人口増加がトルコをはじめとする近隣諸国からのクルド人の密入国と不法滞在によるものだとみなし^(注33)、ハサカ県

における「例外的統計」の実施を「[ハサカ県の]住民台帳を純化し,[真に]シリア国籍を有する者のみが登録された台帳へと再編する」[Human Rights Watch 1996, 38 (Appendix A)]ための政策として正当化していったのである。

1962年法律第93号の規定に沿って1962年10月5日に実施された「例外的統計」において、ハサカ県の人口は予備調査よりも3万1000人少ない30万9000人とされた[*al-Majmū'a al-Iḥṣā'īya* 1963, 56-57]注34)。だがHuman Rights Watch (1996, 12, 15), *Jam'īya Huqūq al-Insān fī Sūriya* (2003, 5-6), McDowall (1992, 122-123), Nazdar (1980, 216) などによると、この統計においてシリア国民と認められず(ないしは、1962年法律第93号が定める通り、1945年以前からシリアに居住していることを文書で証明できず)、国籍を剥奪されたクルド人の数は、予備調査と「例外的統計」におけるハサカ県人口の差を大きく上回り、当時のシリアにおけるクルド人人口の約20パーセント、約12万人に達した(注35)。

国籍剥奪は恣意的なもので、シリア・クルド民主党のサブリー書記長、A・B・ニザームツディーン、そしてその弟で1956年から1957年にかけて参謀総長を務めたタウフィーク・ニザームツディーン(Tawfīq Nizām al-Dīn)など、シリアで生まれ育った著名なクルド人がその対象となっただけでなく、同じ家族のなかでシリア国民と認められた者とそうでない者が生じた[Human Rights Watch 1996, 14; McDowall 2000, 474]。

Ḥamīdī (2004c), *Jam'īya Huqūq al-Insān fī Sūriya* (2003, 6) などによると、国籍を剥奪されたクルド人とその子息の合計は現在、27万5000人から28万人に達し、その多くがハサカ県

のカーミシュリー市、アル=マーリキーヤ市、そしてラアス・アル=アイン市周辺に住んでいる(注36)。また一部はダマスカス市をはじめとする大都市に移住した。

国籍を剥奪されたクルド人は2つのグループに分類され、そのいずれもが一般のシリア国民、さらには外国人居住者が享受する様々な権利を奪われ、「無国籍」(stateless)の民としての生活を強いられている。

第1のグループは、シリア国籍を剥奪された後、住民台帳に「外国人」(ajnabī)として再登録されたクルド人である。その数は1962年に「例外的統計」が実施された時点で2万人におよび、その後、1985年には5万4218人、1995年には6万7465人へと増加、現在は推計で約20万人に達している[Ḥamīdī 2004c; Human Rights Watch 1996, 40 (Appendix A); *Jam'īya Huqūq al-Insān fī Sūriya* 2003, 6]。

「外国人」と認定されたクルド人は当初、「この人物はハサカ[県]のシリア・アラブ人[=シリア国民]の住民台帳においてその名を確認されなかった」とだけ書かれた「1枚の白い紙切れ」[Human Rights Watch 1996, 16]以外のいかなる身分証も与えられなかった。その後1980年代初めに、内務省民事局はこの「紙切れ」に代えて、赤色の身分証を発行し、その携帯を義務づけ、一般の外国人居住者と明確に区別した。

この身分証には、表面に、所持者の顔写真、名・姓、両親の名、出生地・年月日、配偶者の有無、登録地・年月日などが添付・記載され、その下の欄と写真の横にそれぞれ、「1962年の統計の結果、この人物に該当する名は[住民台帳に]存在しなかった」、「[身分証は]国外へ

の渡航に用いることはできない」と記されている。また裏面には、「1962年の統計の結果、上記の人物はハサカ県においてシリア・アラブ人 [=シリア国民] として登録されていないことが判明した。[上記人物の] 要請のもと、同県の外国人名簿に「その氏名が[再]登録された」と書かれている。そしてその下に、日付、所持者の居住地を所轄する内務省当該県民事局長の署名・公印が付されている [Human Rights Watch 1996, 16]

「外国人」はシリアの旅券だけでなく、当局が“故国”と想定する国の旅券すら与えられないため、外国に渡航できない。また、国内においても移動の自由を制限されているほか、選挙権、私有財産の所有、医療福祉、政府機関・国営企業での就労、医師・技師資格の取得、そして結婚^{注37}などを認められていない [Human Rights Watch 1996, 11, 15, 17; Jam'īya Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīya 2003, 6]^{注38}。

第2のグループは、シリア国籍を剥奪された後、住民台帳に再登録されなかった「マクトゥーム」(maktūm) と称されるクルド人である。この言葉はアラビア語で「隠れた」(hidden, concealed, kept, kept secret, undisclosed) [al-Bá albakī 1999, 1096] という意味であるが、シリアのクルド問題の文脈においては、「戸籍に記載されていない[者]」(maktūm al-qayd), 「住民台帳に登録されていない[者]」(ghayr musajjal fī al-sijillāt) を意味する。

「マクトゥーム」はさらに、「外国人」を父に、シリア国民を母に持つ子息、「外国人」を父に、「マクトゥーム」を母に持つ子息、「マクトゥーム」を両親に持つ子息、という3つの集団も含む。その数は、「例外的統計」

が実施された1962年の時点で8000人に過ぎなかったが、1985年には約6万人、1995年には7万5000人にまで増加、現在は推計で7万5000人から8万人に達する [Hamīdī 2004c; Human Rights Watch 1996, 40 (Appendix A); Jam'īya Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīya 2003, 6]

「マクトゥーム」は「外国人」よりもさらに劣悪な状況下での生活を強いられている。彼らはいかなる公式の身分証をも与えられず、彼らが暮らす村の村長が発行した「身分証書」(shahāda tā rīf) を持つのみである。

この書類には、所持者の顔写真、名・姓、両親の名、出生地・出生年月日が添付・記載され、戸籍所在地・登録年月日欄には「戸籍に記載されていない[者]」と記されている。そしてその下の欄には次のように書かれ、村長と地元警察署長の署名と公印が付されている。

「[当該県当該村] 村長である私は、本証書に添付された写真が上記の人物であることを証明する。本証書はこの人物が外国人登録を行うために作成されたものである。この人物はハサカ県の住民台帳にその名を記載されていなかった。以下、署名する」 [Human Rights Watch 1996, 43-46 (Appendix B); Jam'īya Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīya 2003, 6]

「マクトゥーム」は「外国人」が奪われた一連の権利を認められていないだけでなく、公立学校(とりわけ高等教育機関)で教育を受ける自由を制限されている^{注39}。

2. 「アラブ・ベルト」構想(バース党政権)

1963年3月8日のクーデタ(「バース革命」(thawra al-ba'th))でバース党政権が発足して以降も、クルド人に対する抑圧状況が見直されることはなかった。アラブ民族主義を党是とす

る同党の支配のもと、彼らへの差別はさらに“制度化”され、クルド問題は深刻化の一途を辿った。

バアス党政権下でのクルド人に対する抑圧政策は、党ハサカ支部指導部政治局 (fat al-shū ba al-siyāsīya) 長のムハンマド・タラール・ヒラール (Muḥammad Ṭalāl Hilāl) 中尉^{注40}が1963年11月に発表した『アル＝ジャズィーラ県に関する研究 民族的、社会的、政治的側面から』によって、その理論的基礎が提供された。

同書のなかで、ヒラールはまず以下のように断じ、クルド人の存在を否定した。

「この人民 [= クルド人] はアイデンティティを欠いたまま暮らしている... (中略)...。彼らが [共通の] 人種的特徴を備えた単一の人民である... (中略)...と確認し得るような科学的基準はなく、大多数の研究者は、クルド人が様々な部族の混血だとの見解をもつにいたっている... (中略)...。クルド語と呼び得るような言語はなく、通訳無しには意思疎通さえ不可能な、部族ごとに異なった諸々の方言があるに過ぎない... (中略)...。総じてクルド民族は存在しないと結論づけられる。なぜなら [クルド人は] 民族としての基準を欠いており... (中略)...、民族としての祖国を持たないからである。彼らは単なる山岳民でしかなく、そこでの自然が彼らに独特の特質を与えているだけである... (中略)...。クルド人民には... (中略)... [共通の] 歴史も文明も言語も人種もない。力、破壊、暴力といった特質を備えてはいるが、それらは山岳民が持つ特徴に過ぎない」[Hilāl 2001, 13-15]
その上で、彼は「問題 [クルド人による分離

独立運動] の再発を防ぐ」[Hilāl 2001, 57] ための12の計画を提案し、それらをまずハサカ県において実行すべきだと主張した。

国内での強制移住・分散。

蒙昧化 (tajhīl) 政策。クルド人居住地域における学校、教育機関の開設禁止。

トルコ国籍保持者のトルコへの送還、住民台帳の改訂。

労働市場からのクルド人の排除。

アラブ人による反クルド・キャンペーンの実施。

クルド人聖職者 (mashāyikh al-dīn) の宗教的地位の剥奪と、アラブ人聖職者への交代。クルド人どうしの対立の奨励。アラブ起源を持つと主張するクルド人と、「危険分子」(‘ anāshir al-khaṭar, クルド民族主義勢力) の対立の奨励。

国境地帯のクルド人居住地域へのアラブ民族主義勢力の移住と、彼らによるクルド人の監視。

アル＝ジャズィーラ北部の国境地帯の軍事地域・前線地域への指定。

アル＝ジャズィーラ北部の国境地帯におけるアラブ人集団農場の建設。

アラビア語を話せない人々の選挙権・被選挙権の剥奪。

アル＝ジャズィーラでの居住を望む非アラブ人へのシリア国籍付与の禁止 [Hilāl 2001, 58-60]

ヒラールによるこの提案を受けるかたちで、バアス党政権が1960年代半ばに策定したのが「アラブ・ベルト」構想であった。その内容は、社会主義化と農地改革の名のもと、ラアス・アル＝アイン市西部からイラク国境にいたる全長

約275キロメートル、幅約10キロメートルから15キロメートルのトルコ国境地帯（図1を参照）に居住するクルド人農民（332村に住む約14万人）を追放し、その土地を没収したうえで、アレッポ県やラッカ県出身のアラブ人を入植させ、国営のモデル農村を建設する、というものであった〔McDowall 1992, 123; 2000, 475; Nazdar 1980, 217; シリア・クルド・イエキテー党（*Hizb Yakitî al-Kurdî fî Sûriya*, クルド語名 *Partîya Yekitî ya Kurd li Sûriyê*）ホームページ（<http://home.c2i.net.yekiti/kurdishhistory.htm>, 2003年3月閲覧）〕^{注41}。

バアス党政権は発足当初より、戒厳令^{注42}のもとでクルド人に対する差別を散発的に行ってきたが^{注43}、ヒラルルの提案や「アラブ・ベルト」構想はこの動きに拍車をかけた。そして1970年11月、ハーフィズ・アサド（*Hāfiẓ al-Asad*）国防大臣（1971年3月に大統領に就任）が全権を掌握し、バアス党の支配が安定期を迎えると、クルド人に対する制度的差別はさらに厳しさを増した。

バアス党政権、とりわけH・アサド政権下でのクルド人に対する抑圧は主に以下5つの措置を通じて行われた。

第1の措置はクルド人農民の土地没収・追放である。この措置は1960年代半ばに最初に実施され、「アラブ・ベルト」に居住する約4000の家族がその対象となった。またH・アサド政権下の1973年から1976年にかけて再び本格化し、ユーフラテス河畔地域やトルコ国境地域に住むクルド人約6万人が追放され、アラブ人数万人が移住、モデル農村の建設にあたった^{注44}。この政策によって土地を奪われたクルド人は何らの補償も受けることなく故郷を追われ、ダマス

カス市や隣国のレバノン、トルコでの生活を余儀なくされた〔Human Rights Watch 1996, 12-13; McDowall 1992, 123; 2000, 475; Mannā 2004, 7-8; *al-Munāḍil* 1966; Nazdar 1980, 217-218; Sarājī 2004〕。

第2の措置は、クルド語起源の市・村名のアラビア語名への変更である。1970年代に集中的に行われたこの措置の対象となったのは、ハサカ県アイン・アル＝アラブ地方やアレッポ県アフリーン地方にある市・村であった。ハサカ県では、コバーニー市がアイン・アル＝アラブに改称されたほか、ギールディーム、チーラーラー、デルナーコーリング、バーニー・カースリーといった村がそれぞれ、サアディーヤ、アル＝ジャワーディーヤ、ダイル・アイユーブ、アイン・ハドラに改名された。また、アレッポ県アフリーン地方では、地方行政省令第580号（1977年5月18日発令）によって、140以上におよぶすべてのクルド語起源の村の名称がアラビア語風に変更された〔Human Rights Watch 1996, 27-28, 51-61 (Appendix E)〕^{注45}。

第3の措置は公の場でのクルド語による会話の禁止で、1980年代にハサカ県で実施された。すなわち1986年11月11日、ハサカ県知事がまず知事令第25/§/1012号を発令し、職場でのクルド語による会話を禁止し、その後1989年11月3日に知事令第25/§/1865号を発令し、知事令第25/§/1012号の内容を確認するとともに、婚礼などの祝典でのアラビア語以外による歌唱を禁止したのである〔Human Rights Watch 1996, 28; Mannā 2004, 8; McDowall 2000, 476-477〕^{注46}。ただし、クルド人の祝祭、とりわけノールーズ（*Nūrūz*, シリアでは「母の日」〔*'īd al-umm*〕）^{注47}におけるクルド語での歌唱、民族

衣装の着用，クルド風の舞踏については，それらが政治的色彩を帯びない限りにおいて黙認された [Human Rights Watch 1996, 29-30]

第4の措置はクルド風の名前をつけられた新生児の出生届の却下である。この措置は，1960年代後半から当局の“嫌がらせ”というかたちで行われていたが [Mannā 2004, 7]，1992年9月3日，内務省令第122号によって正式に発令され，同年10月1日から実施された [Human Rights Watch 1996, 28; Mannā 2004, 7]

そして第5の措置は非アラビア語名の事業のアラビア語名への変更で，1990年代半ばにハサカ県で実施された。1994年2月24日，ハサカ県知事が，県内の市・村議会と市・村長に対して，アラビア語名でない新規事業（店舗，ホテル，レストランなど）の却下と，アラビア語名への変更を指示するよう通達，またこれまでに認可された非アラビア語名の事業の名称変更を要請したのである [Human Rights Watch 1996, 28-29]

これらの措置以外にも，地理の教科書からのクルド人に関する記述の削除（1967年），クルド語で教育を行う私立学校の開設禁止^(注48)，クルド語による書籍の出版制限^(注49)などが行われた [Human Rights Watch 1996, 29]

バアス党政権が以上のような措置に踏み切った背景には，主に以下3つの要因があったと考えられる。

第1の要因は，イラクやトルコのクルド民族主義運動が波及し，シリア内政を不安定化させることへの警戒感である。1960年代のイラクでは，ムスタファー・バールザーニー（Muṣṭafā Bārzanī）が率いるKDPの武装闘争が激化し，同国のバアス党政権（1963年2月～11月，1968年

7月～2003年4月）はその対応に追われていた。このような隣国での混乱を“教訓”とするかのよう^(注50)に，そしてまたイラクのバアス党との「連帯感」[McDowall 1992, 123]に基づき，シリアのバアス党政権は「アル＝ジャズィーラが第2のイスラエルになることから救え」[McDowall 2000, 473]^(注51)というスローガンを掲げ，「アラブ・ベルト」構想を策定・実施したのである。また1966年以降，シリアとイラクのバアス党が分裂状態に陥ったにもかかわらず，前者はKDPに対して苦戦を強いられていた後者を支援するために援軍を派遣するといった行動もとった。

一方，1980年代に入って，H・アサド政権がクルド語の規制などを通じてクルド人に対する締め付けを強化したことも，トルコ政府に対するPKKの武装闘争と関係していたと思われる。1978年，アブドゥッラーフ・オジャラン（Abdullah Ocalan）が結成したPKKは，1980年9月のトルコでの軍事クーデタ以降，シリア・レバノンに拠点を移した。そしてH・アサド政権の庇護のもと，ダマスカス市，アレppo市，ハサカ市，カーミシュリー市，ダルバースィーヤ市，ダイリーク市，アイン・アル＝アラブ市，アフリーン市などに党事務所を開設し，資金・武器調達，シリアのクルド人青年のリクルートと戦闘員としての養成（およびトルコ，イラクへの派遣）を行うとともに，レバノンのベカーア高原に基地を建設した。PKK支援を通じて，H・アサド政権はトルコの政治・社会情勢を不安定化させ，ハタイ県の返還やチグリス・ユーフラテス両川の水利権をめぐる外交交渉を有利に進めようとした [長場 1999, 39, 41; McDowall 2000, 479; Olson 1995, 169-170]。だが同時に，

PKKの活動がシリア国内のクルド人の民族感情を刺激し、反政府運動を高揚させることを防ぐための措置として、彼らに対する規制を強化したと考えられるのである。

第2の要因は、アル＝ジャズィーラにおける豊富な天然資源の存在である。この地方は、「シリアにおける2つの主要な外貨獲得源である…(中略)…石油、そして…(中略)…綿花・穀物」[Human Rights Watch 1996, 12]^{注52)}を産出している。とりわけ石油は、1956年と1959年にそれぞれカルシュークとスワイディーヤでその埋蔵が確認され、1960年代からバース党政権のもとで本格的な採掘事業が開始された[Collelo 1988, 147]^{注53)}。このことが政権内部に、クルド地域を過疎化させる政策の実施が石油開発の円滑化につながるとの意識を醸成したのである[Human Rights Watch 1996, 12-13; Nazdar 1980, 216]^{注54)}。

そして第3の要因は、バース党と協力関係にあり、クルド人が優位を占める政党・政治勢力の複雑な反クルド感情である。その代表例がシリア共産党のクルド人に対するコンプレックスである。1954年の国会選挙でバクダーシュ書記長を当選させた同党は、1950年代半ば以降、バース党との協力関係を徐々に深め、1972年3月、バース党が中心となって発足した翼賛的政治同盟、進歩国民戦線(al-Jabha al-Waṭaniya al-Taḡaddumiya)^{注55)}に参加、「与党第2党」としての地位を確保した[Ismael and Ismael 1998, 235-236; Tachau 1994, 526-527]。にもかかわらず、シリア共産党の支持者は一部の有識者に限られ[Hiḷāl 2001, 104-107; McDowall 1992, 123]、農民や労働者への党勢の拡大は必ずしも順調ではなかった。そしてこうした事態を受けるかた

ちで、党内では、クルド人の「伝統的・社会的チャンネル」を駆使して勢力拡大を図ろうとした結果、シリア国民全体からの広範な支持獲得が妨げられたとの自己批判が繰り返されたのである^{注56)}。シリア共産党のコンプレックスがシリアのクルド問題を発生させた直接の引き金だったとは断言し得ないが、このような感情の存在^{注57)}が、バース党政権でのクルド人に対する差別・抑圧を助長する遠因となっていたことだけは疑う余地がないであろう。

むすび

シリアのクルド問題は、委任統治時代および独立後の政治的変化のなかで生じたクルド人の民族性に起因する社会的亀裂と恣意的差別が、分離政権とバース党政権のもとで“制度化”することで発生した。にもかかわらず、同問題がシリアの内政において懸案問題として取り上げられることは最近までほとんどなかった。独立から現在にいたるまでのシリア政治史を支配体制の異なる3つの時期に大別して見た場合、クルド人の存在は、そのいずれの時期においても、政治的対立や政争の行方を左右する決定的要因とはならなかったのである。

第1の時期、すなわち1946年(独立)から1963年3月(「バース革命」)にかけての時期は、1949年に3度と、1951年、1954年、1958年^{注58)}、1961年にそれぞれ1度ずつクーデタが発生し、政治的に不安定な状態が続いていたものの、基本的には議会制・政党制が機能し、社会的亀裂は(西欧においてそうであるように)政党・政治組織間の対立に影響をおよぼした。だがこの時期の政治的対立、とりわけ農地改革の是非をめ

ぐる“保守”勢力と“革新”勢力の対立に反映されたのは、階級（“伝統的支配階級”対“被支配階級”）、地域（都市対農村）、宗教・宗派（スンナ派對マイノリティ宗教・宗派）などに基づく亀裂であった〔青山 1995, 51-55; Haddad 1971, 194; Hopwood 1988, 31-32, 80-81, 85-89; Seale 1965, 28-31, 39-41, 158-159, 176-178〕^{注59}。

第2の時期、すなわち1963年3月から1970年11月（「矯正運動」〔al-ḥaraka al-taṣḥīḥīya〕^{注60}）にかけての時期は、バアス党以外の政党・政治組織が政治の場から排除されたことで、政治的対立が同党内の権力闘争として展開した点に特徴を見出すことができる。ここにおいて、党の有力者たちは、「古い社会的亀裂」〔Barakat 1993, 48〕を駆使して、自らが帰属する宗教・宗派集団や血縁・地縁集団の支持獲得に努め、権力を強化していった。その結果、この時期の権力闘争は、地域（都市対農村、大都市対地方都市）、宗教・宗派（スンナ派對マイノリティ宗派、アラウィー派對ドゥルーズ派、アラウィー派對イスマ－イーリー派など）、部族、世代などに根ざす亀裂を反映していった〔アジア経済研究所 1983, 70-71, 85, 87-88, 117-123, 136-137, 139-146; Petran 1972, 128-129, 171-174; Rabinovich 1972, 24-25, 39-40, 45; Seale 1988, 28-29; van Dam 1979, 52-54, 56〕。

第3の時期、すなわち1970年11月以降のH・アサド政権期およびB・アサド政権期は、バアス党政権内の「体制の私物化」(shakhṣana al-nizām)〔al-Turk 2001〕へといたるプロセスが完了し、権威主義・独裁を本質とした支配体制が確立した時期である。ここにおいて、H・アサド政権（そしてB・アサド政権）は、「隠された権力」(sulṭa khafīya)と称される実権を、血

縁、地縁、そして“恐畏”の念（“恐れ”と“畏れ”が相半ばした念）によって大統領個人と結びついた少数集団に独占させるとともに、社会的亀裂を巧みに利用し、シリア国内の多種多様な社会的集団（宗教・宗派集団、地縁・血縁集団）に実体のない「目に見える権力」(sulṭa zāhirīya)を配分することで、“民主的”、“多元的”なありようを誇示し、権威主義・独裁を隠蔽しようとした^{注61}。同時に、政権に脅威をおよぼす一大勢力の台頭を未然に防ぐべく、社会的集団内の亀裂を強調するような人事異動・動員を行うことで、その分断・細分化を図り、自らの相対的な力を強化していった〔青山 2001a, 14-15; 2005a, 26-29; Aoyama 2001, 5-29; Ṣādiq 1993, 71-72, 97-98〕。一方、こうした独断的な支配のもとでは、民主主義や自由の確立をめざす反政府組織の挑戦が絶えなかったが、政権とこれらの組織の対決は、1970年代半ばから1980年代初めにかけてのH・アサド政権とシリア・ムスリム同胞団(Jamā a al-Ikhwān al-Muslimīn fī Sūriya)の対決がそうであったように、地域（都市対農村）、宗教・宗派（スンナ派對アラウィー派）に起因する亀裂を反映した〔青山 1994, 127-134〕。

むろん、クルド人を政治の周辺に追いやってきたこのような事態を打開しようとする動きが皆無だった訳ではなく、とりわけH・アサド政権下には、クルド民族主義勢力が中心となって、クルド人に対する差別・抑圧の撤廃や、クルド問題の解決を訴える抗議行動が繰り返された。だが彼らの活動は政府の容赦ない弾圧に曝され、挫折と閉口を余儀なくされたのである。例えば1986年3月21日、ノールーズの祝典中にクルド人が治安当局と衝突、複数の負傷者を出す事件

表2 シリアの主なクルド民族主義政党（2005年1月現在）

シリア・クルド民主党（アル・パルティー） al-Hizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriyā (al-Bārtī), クルド語名 Partîya Demokrat ya Kurdî li Sûriyê (al Partî)) ナスルッディーン・イブラーヒーム ム (Naşr al-Dīn Ibrāhīm) 派 ^{(a)(b)(c)}
シリア・クルド民主党（アル・パルティー）ムハンマド・ナズィール・ムスタファー（ Muḥammad Nadhīr Muşṭafā ）派 ^{(b)(c)(e)}
シリア・クルド左派党（ al-Hizb al-Yasārī al-Kurdī fī Sūriyā , クルド語名 Partîya Çep a Kurd li Sûriyê ）ハイルッディーン・ムラード（ Khayr al-Dīn Murād ）派 ^{(a)(c)(e)}
シリア・クルド左派党ハイルッディーン・イブラーヒーム（ Khayr al-Dīn Ibrāhīm ）派 ^{(b)(c)(e)}
クルド・シリア民主党（ al-Hizb al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī al-Sūrī , クルド語名 Partîya Demokrat a Kurd a Sûrî ） ^(c)
シリア・クルド進歩民主党（ al-Hizb al-Dīmuqrāṭī al-Taqaḍdumī al-Kurdī fī Sūriyā , クルド語名 Partîya Dêmoqrātî Pêşverû Kurd li Sûriye ）アブドゥルハミード・ダルウィーシュ（ ‘ Abd al-Ḥamīd Darwīsh ）派 ^{(a)(c)(e)}
シリア・クルド進歩民主党アズィーズ・ダーウド（ ‘ Azīz Dāwud ）派 ^{(b)(c)(e)}
シリア・クルド人民連合党（ Hizb al-Ittiḥād al-Shā b īal-Kurd ī fī Sūriyā , クルド語名 Partîya Hevgirtina Gelê Kurd li Sûriyê ） ^{(c)(e)}
シリア・クルド・イエキーティー党（ Hizb Yakītī al-Kurdī fī Sūriya , クルド語名 Partîya Yekîtî ya Kurd li Sûriyê ） ^{(c)(d)(e)}
シリア・クルド民主統一党（イエキーティー）（ Hizb al-Waḥda al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriya (Yakītī) , クルド語名 Partîya Yekîtî ya Demoqrāt ya Kurd li Sûriyê (Yekîtî) ） ^{(a)(c)(e)}
シリア・クルド国民民主党（ al-Hizb al-Dīmuqrāṭī al-Waṭanī al-Kurdī fī Sūriyā ） ^{(b)(c)}
シリア・クルディスタン民主パルティー（ Bārtī Dīmuqrāṭī Kurdistan Sūriyā , クルド語名 Partîya Democrat a Kurdistanê - Sûriyê ） ^(d)
シリア民主連合党（ Hizb al-Ittiḥād al-Dīmuqrāṭī fī Sūriyā , クルド語名 Partîya Yekîtî ya Demokratîk ） ^(c) クルド・シリア民主合意（ al-Wifāq al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī al-Sūrī ）

（出所）青山（2005b; 2006）をもとに筆者作成。

（注）（a）シリア・クルド民主同盟（ al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭī al-Kurdī fī Sūriya, クルド語名 Hevbendiya Demokrat
a Kurd li Sûriyê ）加盟政党・組織。

（b）シリア・クルド民主戦線（ al-Jabha al-Dīmuqrāṭīya al-Kurdīya fī Sūriya, クルド語名 Bera Demokrat a
Kurd li Sûriyê ）加盟政党・組織。

（c）シリアにおけるすべてのクルド政党（ Majmū al-Aḥzāb al-Kurdīya fī Sūriyā ）の名で発表された声明に署名
している政党・組織。

（d）シリア民主同盟（ al-Taḥāluf al-Dīmuqrāṭī al-Sūrī ）加盟政党・組織。

（e）基本的自由・人権擁護国民調整委員会（ Lajna al-Tansīq al-Waṭanī li-l-Difā‘ an al-Ḥurriyāt
al-Asāsīya wa Ḥuqūq al-Insān ）加盟政党・組織。

が発生した [Mannā 2004 , 8]。また1992年3月、ハサカ県のクルド人8人が戒厳令施行16周年に
合わせて、国籍を剥奪されたクルド人の惨状を訴える小冊子を配布したが、当局によって逮捕
された [Human Rights Watch 1996 , 33]。さらに同年10月5日、クルド民族主義政党が「例外的
統計」30周年に併せて声明を発表し、クルド

人の文化的自治を要求すると、当局はハサカ市、ラアス・アル＝アイン市、カーミシュリー市、
アレッポ市、アフリーン市で約260人を逮捕した [Human Rights Watch 1996 , 33-34 ; Mannā
2004 , 8]。そして1996年にも、ノールズに際して「例外的統計」に抗議した複数のクルド人
が逮捕された [Mannā 2004 , 8]。

こうして見ると、シリアのクルド問題は、権威主義・独裁体制、とりわけH・アサド前大統領による強権支配のもとで、その噴出を抑え込まれてきたと指摘できる。しかしながら、これまでのクルド民族主義勢力の政治的挫折そのものに目を転じると、そこには彼ら自身の活動のありようが大きな影を落としていることもまた否定し得ない。

前述したとおり、クルド民族主義勢力は、1957年のシリア・クルド民主党の発足をもってその活動を本格化させた。だが1960年代以降のクルド人に対する差別・抑圧の“制度化”は、彼らの結束を強化することも、その勢力を拡大させることもなく、政治路線をめぐる対立（シリアにおけるクルド人の政治的・文化的自治の追求か、クルディスターンの独立・統一の実現か）、政権との関係をめぐる対立（政権との交渉・取引を通じて政治参加を実現するか、非妥協的な抵抗運動を行うか）、そして隣国のクルド民族主義勢力（PKK, KDP, クルディスターン愛国連盟〔al-Ittihad al-Waṭanī al-Kurdistānī, 英語名 Patriotic Union of Kurdistan, 略称 PUK〕など）との関係をめぐる対立を助長していった。その結果、本稿執筆時において、シリアのクルド民族主義勢力は、表2に列記したような政党・政治組織に分裂し、政権に対する相対的な抵抗力を失ってしまったのである。

B・アサド政権の発足はこうした閉塞状態に変化をもたらそうとしてはいる。すなわち、「ダマスカスの春」(rabī dimashq)^{注62}に代表される反政府勢力の改革運動の興隆と、フセイン政権崩壊後のイラクにおけるクルド人の政治的台頭は、B・アサド政権にクルド問題への積極的対処を迫るとともに、シリアのクルド民族主

義勢力に活動再開と勢力拡大の好機を与えている。しかし、クルド問題の解決とクルド人の地位向上をめざすクルド民族主義勢力の道のりは決して平坦なものではない。なぜなら、彼らは自らの民族主義運動を展開するにあたって、クルド問題を含むシリアのありとあらゆる政治、経済、社会問題の原因の一端を担っている権威主義・独裁にいかに対処すべきかを考慮しなければならず、その際にクルド人の“民族的”な要求だけでなく、B・アサド政権のもとで疎外されているすべてのシリア人の“国民的”な要求をも代弁する必要に迫られているからである。こうしたなかで、シリア社会の分断をもたらすような安易な活動を展開し、特定の社会集団（クルド人）のみの利益を代表しようとすれば、それは政権に弾圧の口実を与えるだけでなく、クルド問題の根底に存在する権威主義・独裁体制の延命にさえ寄与することになるだろう。

（注1）アラビア語は大塚ほか（2002）のカタカナ・ローマ字翻字に従った。

（注2）カーミシュリー事件の経緯については、*Akhbār al-Sharq* (2004a), Efrin.net (2004a; 2004b; 2004c; 2004d), Ḥamīdī (2004a; 2004b; 2004d), Ḥamīdī and al-A thar (2004), Jam'īya Huqūq al-Insān fī Sūriyā (2004)などを参照。なお *Akhbār al-Sharq* (2004b), Ḥamīdī (2004c)によると、シリア内務省は死者の数を25人（ハサカ県で19人、アレッポ県で6人）と公式に発表した。

（注3）カーミシュリー事件が発生する直前の2004年3月8日、イラク基本法（正式名暫定期間イラク国家行政法）が制定され、その第9条でアラビア語とともにクルド語が公用語として認められた。また第53条と第54条では、イラク北部を統治するクルディスターン地域政府（ḥukūma iqlīm kurdistān）を暫定期間中存続することが認められた〔*Qānūn Idāra al-Dawla al-'Irāqīya li-l-Marḥala al-Intiqā'iya* 2004〕。

(注4) B・アサド政権に対して政治・社会改革を要求した有識者が発足した団体で、市民社会、基本的諸自由、民主主義の実現などをめざした [青山 2005a, 38-39]。

(注5) Ramadān (n.d.) はクルディスタンを「北はアララット山、南はハムリーン山、東はルリスタン、西はマラティヤに広がる約50万平方キロメートル」の地域としている。

(注6) クルド語は、クルマーンジー、ソーラーニー (Sorani), グラーニー (Gurani), ザーザー (Zaza) といった方言に分かれている。なおクルド語の方言の分類や呼称については Hassanpour (1992, 19-26) に詳しい。

(注7) 宗教・宗派集団別の人口統計も、*al-Tā'dād al-Āmm li-l-Sukkān* (1960, 16-19) において、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、その他の宗教・宗派宗徒の人口が公表された1960年以降実施されていない。

(注8) Vanly (1992, 229) によると、本稿はイスメト・シェリフ・ヴァンリー (Ismet Chëiff Vanly) が偽名で発表した。

(注9) McDowall (2000, 466-467) によると、シリアのクルド人の多くがアラビア語を解し、とりわけダマスカス市のクルド人は1920年までにその約40パーセントがアラビア語を母語とするようになった。また北東部のシンジャール山麓と、北西部のサムアーン山、アフリーン渓谷で暮らすクルド人のなかにはヤズィーディー派もいる。

(注10) なお al-Majmū a al-Iḥṣā' iya (2003, 15) によると、シリアの国土の面積は18万5179.71平方キロメートル。

(注11) 宗派主義は、19世紀半ばのレバノンで政治・社会制度としてその原型が形成され、フランス委任統治時代の国民協約 (1943年) によって体制として確立した。同協約は、キリスト教のマロン派、ギリシャ正教徒、アルメニア正教徒、イスラーム教のスナ派、シーア派 (12イマーム派)、ドゥルーズ派といったレバノンの主な宗教・宗派に、人口比に従って公的機関のポストを割り当てることを定めたものである。これにより、大統領はマロン派、首相はスナ派、国会議長はシーア派、副首相と国会副議長はギリシャ正

教徒と定められ、主要な閣僚ポストや国会の議席も各宗教・宗派に配分されていった。

(注12) van Dam (1979, 40) によると、スナ派・アラブ人、とりわけ裕福な大地主や商人は、委任統治当局への協力・奉仕を嫌い、自らの子息を軍人にすることを避ける傾向があった。

(注13) 委任統治が開始された1920年、シリアは、スナ派・アラブ人がマジョリティを占めるダマスカス国とアレppo国、そしてアラウィー派をマジョリティとするラタキア国に分割された他、トルコ人が多く住むアレキサンドレッタ地方 (リワー) がアレppo国内の自治区に指定された。1922年、これらの国・自治区のうち、ダマスカス国、アレppo国、ラタキア国がシリア連邦を形成する一方、ドゥルーズ派が多いジャバル・アッ = ドゥルーズ一帯がダマスカス国から自治区として切り離された。さらに1924年、今度はアレキサンドレッタ地方、ラタキア国、ジャバル・アッ = ドゥルーズ自治区を除いたかたちで、ダマスカス国とアレppo国がシリアとして統合された。その後1936年、ラタキア国とジャバル・アッ = ドゥルーズ自治区がシリアに編入されたが、1939年から1942年にかけて再び分離、またアレキサンドレッタ地方は1938年にハタイ共和国として独立した後、翌1939年にトルコに併合された [Khoury 1987, 58-59]。

(注14) 第1次大戦の戦後処理の一貫として締結されたセープル条約において、オスマン帝国内のクルド人は同条約発効から1年以内の独立を前提に自治を認められた。だがセープル条約の改定をめざして新生トルコが連合国との間に締結したローザンヌ条約では、クルド人の独立に関する文言の一切が削除された [勝又 2001, 78]。

(注15) Hassanpour (1992, 137), McDowall (2000, 468), シリア・クルド人民連合党ホームページ (<http://www.hevgirtin.org/html/serkirde/mir.htm>, 2004年12月閲覧) などによると、C・ベドウルハーンはまた、ダマスカス市で妻レウシェン・ハーンム・ベドウルハーン (Rewsen Xanim Bedirxan) とともに、クルド語雑誌『ハーワール』 (*Hawar*)、『ローナーヒー』 (*Ronahi*) を創刊するなど活発な活動を展開し、同市のクルド人医師、弁護士、記者などをクルド民族

主義に感化していった。なお Strohmeier (2003, 95) によると、ホーイブーン運動はレバノンのブハムドゥーン市で結成された。

(注16) なお Rondot (1939, 105-106) によると、1928年6月23日、シリア国会でも「クルド地域におけるクルド語の使用と教育、同地域の政府職員へのクルド人の採用」が要求された。

(注17) McDowall (2000, 472-473) によると、シリア(そしてイラク)のクルド人有識者の多くは、民族意識を階級意識に従属させるマルクス主義の政治的イデオロギーに引きつけられていった。

(注18) なお、クルド人が拠り所とした“超国家・民族主義的”なイデオロギーとしては、マルクス主義の他にもイスラームがあり、2004年9月まで共和国ムフティーを務めたアフマド・カフタールー (Aḥmad Kaftārū) やダマスカス大学シャリーア学部長のムハンマド・サイード・ラマダーン・ブーティー (Muḥammad Sā'id Ramaḍān al-Būṭī) らが、宗教権威としての地位を得ることで“立身出世”を果たした。

(注19) Be ʿeri (1970, 336-337), Seale (1965, 37), Torrey (1975, 157), van Dam (1979, 40-41) によると、“被支配階級”にとどめて、軍への入隊は社会的地位を盛り詰めるための好機として歓迎された。

(注20) ザイーム軍事政権下の1949年6月から8月にかけて、バラズィーが首相を務めた。

(注21) シーシャクリー政権崩壊(1954年2月)以降、軍からクルド人士官が徐々に排除されていった。ただし、McDowall (2000, 472) によると、T・ニザームッディーン参謀総長の解任(1957年)は、彼がクルド人だったことが理由ではなく、シリアとソ連の接近の是非をめぐる軍内部の派閥争いによるものだった。

(注22) 独立直後のシリアにおいて、クルド民族主義勢力は、カームラーン・ベドゥルハーン (Kamran Bedirxan, C・ベドゥルハーンの弟) がバリでイスラエルとの連携を通じたクルド人の独立国家建設を画策した以外には目立った動きを見せていなかった。なおクルド人の政治的アクターのなかには、クルド民族主義勢力に合流せず、A・B・ニザームッディーンに代表されるように、シリアという国家枠組みのなかで活動を継続しようとする者や、シリア共産党に参加して

いった者も少なからずいた。

(注23) Zengî (2002) によると、シリア・クルド民主党が発足する2年前の1955年、サブリーがクルド文化復興協会 (Komela Vejîa Çanda Kurdî, エンジューメン [Encûmen]) を発足していた。

(注24) Mannā (2004, 7) によると、シリア・クルド民主党は、発足にあたって当局に公認申請を行わず、“秘密結社”として活動した。

(注25) シリア・クルド民主党はまた機関紙『アル・パルティー』(Al Partî) を刊行し、宣伝活動を行った。

(注26) McDowall (2000, 474) によると、シリア・クルド民主党の弾圧やクルド人迫害は、イスラエルとの協力を画策したK・ベドゥルハーンの活動によって、クルド民族主義がシオニズムと結託しているという疑念が生じたこととも関係していた。

(注27) Mannā (2004, 7) によると、シリア・クルド民主党員への大規模な逮捕は1959年に行われた。

(注28) Ramaḍān (n.d.) によると、サブリー書記長はこうした圧力に屈せず、そのことが後にシリア・クルド民主党とシリア・クルド左派党の分裂をもたらすことになった。

(注29) Kinnane (1964, 44) によると、軍や警察が投票箱をすり替え、政府にとって好ましい投票結果を捏造した。

(注30) 制憲議会選挙の実施日程を定めることを目的とした暫定憲法は全10条からなり、第1条で「シリア・アラブ共和国は独立主権国家であり、大いなるアラブのくにの一部をなす」と謳っていた。なお暫定憲法全文については al-Hawrānī (2000, 2944-2945) を参照。

(注31) 同様の姿勢は「バース革命」後にバース党によってもとられた。すなわち1963年10月の第6回民族大会において、バース党は社会主義の実現をアラブ統一に優先させる決定を下し、基幹産業の国有化や農地改革を本格化させたが、この理論修正の背景には、アラブ連合共和国時代よりも急進的・抜本的な改革を推進することで、ナセル大統領に対抗するという意図があった [青山 2001b, 210]

(注32) al-Majmū'a al-Ihsā'iya (1961, 25) による

と、1954年と1961年のシリアの総人口はそれぞれ380万7000人、497万2000人。

(注33) 1996年7月、在ワシントンDC・シリア大使館が米国の人権団体ヒューマン・ライツ・ウォッチ (Human Rights Watch) に宛てた文書では次のように記されている。「1945年初めから、クルド人がハサカ県に潜入し始めた。彼らは... (中略) ...近隣諸国、とりわけトルコから、ララス・アル＝アイン [市]・アル＝マーリキヤ [市] 間の国境を不法に越えて入国した。そしてダルバースィヤ [市]、アームーダ [市]、カーミシュリー [市]、カフターニーヤ [市]、アル＝マーリキヤ [市] といった都市のある国境地帯に不法に居住し、アームーダ [市] やダルバースィヤ [市] ではマジョリティを構成するにいたった。これらのクルド人の多くがシリアの住民台帳に不法に登録し... (中略) ...、身分証を取得していった」 [Human Rights Watch 1996, 39 (Appendix A)]

(注34) *al-Majmū'a al-Iḥṣā'īya* (1963, 56-57) によると、1962年のシリアの総人口は518万人。

(注35) Human Rights Watch (1996, 40 [Appendix A]) によると、シリア政府はその後、「例外的統計」によって一部のシリア人が不当に国籍を剥奪された事実を認め、これらの人々の異議申し立てを受理した。その結果、1966年に8万4000人を数えた「外国人」は、1986年には4万587人に減少した。なお、Human Rights Watch (1996, 15) によると、国籍剥奪は1973年にも行われ、少なくとも数百人がその対象となった。

(注36) Human Rights Watch (1996, 18) によると、ハサカ県の国籍剥奪者は20万人におよび、うち7万3000人がカーミシュリー市、ダルバースィヤ市、アームーダ市一帯に、12万人から13万人がハサカ市、アル＝マーリキヤ市、カフターニーヤ市一帯で暮らす。

(注37) Human Rights Watch (1996, 17) によると、「外国人」の婚姻届はシリアの地方自治体によって受理されない。

(注38) McDowall (1992, 123), Thornberry (1989, 202) によると、「外国人」、そして「マクトゥーム」は多くの権利を失ったにもかかわらず、シリア軍への徴兵義務を課せられた。

(注39) Human Rights Watch (1996, 23) によると、

「マクトゥーム」は、政治治安部 (Idāra al-Amn al-Siyāsī, ムハーバラート [mukhābarāt, 軍, パス党, 内務省の管轄下にある諜報機関, 秘密警察, 武装治安部隊の総称] のひとつ) の許可がなければ、9年間の初等教育さえも受けられない。

(注40) ヒラルは1967年6月から1970年11月まで供給大臣を、1970年11月から1971年4月まで副首相、農業大臣、農業改革大臣を、そして1971年4月から1972年3月まで副首相、工業大臣を務めた。また1971年11月から1971年5月までパース党地域指導部メンバーを務めた。

(注41) Sarūjī (2004) によると、1966年9月に開催されたパース党第3回シリア地域大会では、「長さ350キロメートル、幅10キロメートルから15キロメートルのシリア・トルコ国境の土地... (中略) ..を国有地とみなし、国家安全保障を実現し得るにふさわしい投資制度を適用する」との提言が出された。また同年11月、党内雑誌『アル＝ムナーディル』 (*al-Munādīl*) に掲載された「ハサカ県における国営農場建設計画に関する決定」では、「アラブ・ベルト」地帯におけるすべての村を国有地とみなし、同地帯に投資する権限を国家に与えるための新たな法律を制定する、同地帯に投資を行うための実務的・科学的計画を策定する、上記の措置を計画的に実施する、同地帯に集住するクルド人を強制移住させ排除する、アラブ人移民によるモデル村の建設を推進する、という5つの提案がなされた [*al-Munādīl* 1966]

(注42) 戒厳令はハーリド・アズム (Khālid al-'Azm) 内閣 (1962年9月～1963年3月) がイスラエルとの戦争状態を理由に1962年12月22日立法第51号として発令し、「パース革命」直後の軍事令第2号 (1963年3月8日発令) によって継続が確認された。これにより、集会、結社、移動の自由などが制限されるとともに、ムハーバラートによる検閲、尋問、拘束、逮捕、軍事裁判所での裁判などが許可された。

(注43) 例えば1963年、内務省がハサカ県民の戸籍の移動を禁止する通達を出し、同県のクルド人の移動を制限した。また翌年には、ハサカ県全土を「国境地帯」に指定する1964年11月11日立法第1360号が制定された。

(注44) Human Rights Watch (1996, 12)によると、H・アサド政権は、ハサカ県に住むクルド人の70パーセントから80パーセントに相当する15万人を放逐し、アラブ人農民を入植させようと企図した。

(注45) なお al-Tammū (2003)によると、同様の措置は、1980年代と1990年代にもハサカ県とアレppo県の双方で再三にわたって行われた。

(注46) 知事令第25/§/1865号を発したハサカ県知事ムハンマド・ムスタファー・ミールー (Muḥammad Muṣṭafā Mīrū) は2000年3月から2003年9月にかけて首相を務めた。

(注47) 春分の日の祝祭で、クルド語では「ネウローズ」(Newroz, 「新たな日」を意味する) という。ペルシャ暦(イラン太陽暦)の正月にあたるこの祝祭は、ゾロアスター教の影響が見られるとされ、人々は家族や友人と贈り物を交換したり、食べ物を携えて野原に繰り出し、伝統舞踏を踊ったり、火を焚いてその上を跳び越えたりして祝う。クルド人の伝説によると、冷酷なデハーク(Dehak)という王に息子を生贄に差し出すよう命じられたカーワー(Kawa)という鍛冶職人が、この王を殺して、人々を圧政から解放したのがこの日で、厳しい冬の終わりりと圧政からの解放が重なり合っている[勝又 2001, 215-216]

(注48) Human Rights Watch (1996, 29)によると、アルメニア人(教徒)、コーカサス人、アッシリア人、キリスト教徒諸派などといったクルド人以外のマイノリティは私立学校の開設を認められている。

(注49) ただしクルド語書籍への規制は徹底したものでなく、当局はシリア国内での印刷・出版を制限しているものの、販売や近隣諸国からの書籍の流入には比較的寛容である。

(注50) *al-Munāḍil* (1966) では次のように述べられている。「イラク北部の我らアラブ人民が直面し続け、帝国主義が創出した危機は、数年前からハサカ県を脅かし始めていたにもかかわらず、前政権[分離政権]はそれを無視していた。しかし今日、それを根本的・完全に解決する必要がある...(中略)...。帝国主義が支援・奨励する計画に沿って...(中略)...、クルド人が...(中略)...トルコとイラクからこの地域に移住し続け...(中略)...、この肥沃な地域に帰化してい

る...(中略)...。地域における封建制の存在と...(中略)...、北部国境で...(中略)...民族国家建設の準備を進めるクルド人...(中略)...の存在ゆえに、我々は早急にこの地域のアラブ人を救済するための必要な措置を講じなければならない。」

(注51) 例えば *al-Munāḍil* (1966) では「クルド人の存在はハサカ県に第2のイスラエルの建設をめざす陰謀だ」と述べられている。

(注52) *al-Majmā'a al-Iḥṣā'īya al-Zirā'īya al-Sanawīya* (1975, 24-25, 28-29, 66-67)によると、1975年の綿花の生産量は全国で41万4336キログラム、ハサカ県で9万3496キログラム、小麦の生産量は全国で155万61キログラム、ハサカ県で53万3516キログラム、大麦の生産量が全国で59万6544キログラム、ハサカ県で15万6241キログラムと、いずれもハサカ県が全国一の生産量を誇っていた。

(注53) Collelo (1988, 147-153)によると、1960年代のカルシュークとサアディーヤでの石油発掘量はそれぞれ、3万バレル/日、2万バレル/日に達し、これによってシリアは1968年に石油輸出国へと転じた。また1970年代になって、カルシューク南西10キロメートルに位置するルマイランで石油が発見され、同地では1984年までに3900万バレル/日の石油が採掘された。

(注54) *al-Munāḍil* (1966)、al-Tammū (2003)によると、アル＝ジャズィーラでの石油発見は、同地方の高い農業生産量とあいまって「アラブ・ベルト」構想の深化を促した。

(注55) パアス党、統一社会主義者党 (Ḥizb al-Waḥdawiyyīn al-Ishtirākīyīn)、アラブ社会主義者運動 (Ḥaraka al-Ishtirākīyīn al-'Arab, 現アフマド・ムハンマド・アフマド [Aḥmad Muḥammad al-Aḥmad] 派)、アラブ社会主義連合党 (Ḥizb al-Ittihad al-Ishtirākī al-'Arabī)、シリア共産党 (現ウィサール・ファルハ [Wiṣāl Farḥa] 派) によって結成され、その後、統一社会民主主義党 (al-Ḥizb al-Waḥdawī al-Ishtirākī al-Dīmuqrāṭā, 1989年加盟)、シリア共産党 ユースフ・ファイサル (Yūsuf Fayṣal) 派 (1986年加盟)、アラブ社会主義者運動ガッサーン・アブドゥルアズィーズ・ウスマーン (Ghassān Abd-

‘Azīz Uthmān) 派 (1994年加盟), アラブ民主連合党 (Ḥizb al-Ittihād al-‘Arabī al-Dīmuqrāṭī, 2004年加盟) が加盟していった。

(注56) 例えば1970年11月13日, シリア共産党国民会議 (al-majlis al-waṭanī) でヒムス地域委員会 (al-lajna al-mintaqiya) のワースィル・ファイサル (Wāṣil Fayṣal) は, 「我々の党内... (中略) ...において, なぜ狭量な民族主義的ショーヴィニズムが鼓舞されるのか? 我々の党がクルド人の中で力を得たとしても, アラブ人労働者の中で力を得ることも失うこともない」[*Qaḍāyā al-Khilāf fī al-Ḥizb al-Shuyū‘ī al-Sūrī* 1972, 415] と述べ, 党内におけるクルド人の優位を批判した。

(注57) 政権に協力的なクルド人による反クルド感情の表明は, シリア共産党に限られるのではなく, ダマスカス大学シャリーア学部長のプーティーら, クルド人宗教関係者によってもしばしば行われた。

(注58) Haddad (1971, 235-236), Seale (1965, 314-326) によると, 1958年2月1日のシリアとエジプトの合邦は, 実質的には統一をめざすアブドゥルハミード・サッラージュ (‘Abd al-Ḥamid Sarrāj) 大佐やアフイーフ・ビズリー (‘Afif Bizrī) 大将による軍事クーデタだった。

(注59) “保守” 勢力は, 当時政権を交代してきた二大政党の国民党 (al-Ḥizb al-Waṭanī) と人民党 (Ḥizb al-Shāb) からなり, “伝統的支配階級”, 都市, シーナ派の利益を代表し, 既存の経済・社会体制の維持と政治的優位をめざした。一方, “革新” 勢力はバアス党, シリア共産党, そして軍からなり, “被支配階級”, 農村, マイノリティ宗教・宗派を代弁する存在として “伝統的支配階級” に抵抗した。むろん, “保守” 勢力と “革新” 勢力はいずれも一枚岩だったわけではなく, 社会的亀裂に起因する対立要素を内包していた。“保守” 勢力においては, ダマスカスに支持基盤を持つ国民党と, アレッポやハマーを拠点とする人民党が, 地域的な利害をめぐって鋭く対立していた。また “革新” 勢力においては, アラブ民族の統一を最優先させるバアス党と, マルクス主義における国際主義や非妥協的な階級闘争の原理に依拠するシリア共産党との間にイデオロギー的志向をめぐる意見の相違が見られた

[青山 1995, 52; Seale 1965, 77-79]

(注60) 1970年11月13日のḤ・アサド前大統領によるクーデタの公式名称。

(注61) 「隠された権力」, 「目に見える権力」については Ṣādiq (1993, 71-72) を参照。

(注62) B・アサド政権による改革志向の誇示 (そしてḤ・アサド大統領の死) を受け, “左派” を中心とする有識者らが2000年秋に開始した改革運動の通称で, 文化会議の発足などを通じて, 市民社会の確立をめざした [青山 2005a, 37-62]

文献リスト

< 日本語文献 >

- 青山弘之 1994. 「シリア・ムスリム同胞団のプロパガンダ 1976～1982年の反政府運動を中心に」『日本中東学会年報』第9号 117-141.
1995. 「シリア・ムスリム同胞団の政治理念と政策 (1940年代後半～50年代初め)」『アジア経済』第36巻第11号 (11月) 47-68.
- 2001a. 「“ジウムルーキーヤ” への道 (1) パッシャル・アル=アサド政権の成立」『現代の中東』第31号 (7月) 13-37.
- 2001b. 「「バアスの精神的父」ザキー・アル=アルスズイー」酒井啓子編『民族主義とイスラーム宗教とナショナリズムの相克と調和』アジア経済研究所研究双書No. 514 日本貿易振興会アジア経済研究所 175-227.
2002. 「“ジウムルーキーヤ” への道 (2) パッシャル・アル=アサドによる絶対的指導性の顕現」『現代の中東』第32号 (1月) 35-65.
2003. 「シリアにおける政党・政治組織 パッシャル・アル=アサド政権発足以降を中心に」酒井啓子・青山弘之編「中東諸国における政権権力基盤と市民社会」研究会中間報告」日本貿易振興会アジア経済研究所 63-116.
- 2005a. 「権威主義・独裁維持のための「多元主義」 パッシャル・アサド政権下のシリア」酒井啓子・青山弘之編『中東・中央アジア諸国における権力構造』したたかな国家・翻弄される社会』アジア経済研究所叢書1 岩波書店

- 25-70.
- 2005b. 「シリアにおけるクルド民族主義政党・政治組織」『現代の中東』第39号(7月)58-84.
2006. 「シリアにおけるクルド民族主義政党・政治組織」『現代の中東』第40号(1月)58-84.
- アジア経済研究所編1983. 『現代東アラブの政治構造』調査レポート6アジア経済研究所.
- 大塚和夫ほか編2002. 『岩波イスラーム辞典』岩波書店.
- 勝又郁子2001. 『クルド・国なき民族のいま』新評論.
- 長場紘 1999. 「トルコとシリア 対立の構図(1)」『現代の中東』第26号(3月)30-42.
- <外国語文献>
- ‘Abbūd, Shā’ bān 2004. “Aḥzima al-Bu ‘s (wa rubbamā al-‘Unf) ḥawla Dimashq wa fī-hā: 50 Ḥayyan Mukhālīfan li-l-Qānūn Taḍumm 40 fī al-Mi ā min al-Sukkān [ダマスカス市内および周辺における絶望(そしておそらくは暴力)の地帯 40%の住民が住む50の地区が違法]” *al-Nahār* April 29.
- Akhbār al-Sharq <http://www.thisissyria.net/> 2004a. “14 Qatilan fī Muwājahāt Damawīya bi-al-Qāmishlī wa Iqtihām al-Sifāra al-Sūrīya fī Burüksil [カーミシュリーでの血の対決で14人死亡, 在ブリュッセル・シリア大使館への侵入]” March 14.
- 2004b. “Wāshintun Tahtajj ‘alā “Qam” Akrad Sūrīyīn wa Tu ākkid qurba Farḍ al-‘Uqūbāt [ワシントンがシリアのクルド人に対する「抑圧」に抗議し, 制裁発動が間近であることを確認]” March 18.
- Aoyama, Hiroyuki 2001. *History Does Not Repeat Itself (Or Does It?) The Political Changes in Syria after Ḥāfiẓ al-Asad’s Death*. M.E.S. Series No. 50. Chiba: Institute of Developing Economies, JETRO.
- Arfa, Hassan 1966. *The Kurds: An Historical and Political Study*. London, New York and Toronto: Oxford University Press.
- al-Bā albakī, Rūḥī 1999. *al-Mawrid: Qāmūs ‘Arabī - Inkilāzī* [アル=マウリド アラビア語英語辞典] 11th edition. Beirut: Dār al-‘Ilm li-l-Malāyīn.
- Badr al-Dīn, Ṣalāḥ 2003. *al-Ḥaraka al-Qawmīya al-Kurdīya fī Sūrīya: Ruḥya Naqdīya min al-Dākhil* [シリアにおけるクルド民族主義運動 批判的洞察] Beirut: Rābiṭa Kāwā li-l-Thaqāfa al-Kurdīya.
- Badrkhān, Sardār 2003. “al-Dhikrā al-Thalāthūn li-Mashirū al-Ḥizām al-‘Arabī fī al-Jazīra Waṣma ‘Ārr fī Jabīn al-Shūfīniya [アル=ジャズィーラでのアラブ・ベルト構想30周年はショーヴィニズムへの非難の証]” *Amude.net*(<http://www.amude.net/>) July 1.
- Barakat, Halim 1993. *The Arab World: Society, Culture, and State*. Berkley: University of California Press.
- Be ēri, Eliezer 1970. *Army Officers in Arab Politics and Society*. New York: Praeger.
- Bulloch, John and Harvey Morris 1992. *No Friends but the Mountains: The Tragic History of the Kurds*. London: Viking.
- Ciment, James 1996. *The Kurds: State and Minority in Turkey, Iraq and Iran*. New York: Fact on File.
- Collelo, Thomas, ed. 1988. *Syria: A Country Study*. Area Handbook Series, Washington, D.C.: U.S Government Printing Office.
- Commins, David 1996. *Historical Dictionary of Syria*. Arab Historical Dictionaries, No. 22, Lanham and London: The Scarecrow Press, Inc.
- Efrin.net (<http://www.efrin.net/>) 2004a. “Muḥāsara al-Ṭalaba al-Akrād fā Jāmī a Ḥalab [アレppo大学でクルド人学生が包囲]” March 14.
- 2004b. “Tazāhurāt Silmīya fī al-Jazīra Tuwājīh-hā al-Sulṭāt bi-al-Qatīl [アル=ジャズィーラでの平和的デモ, 当局との衝突で死者]” March 14.
- 2004c. “I tiṣām amāma Majlis al-Shā b Iḥtijājan ‘alā Majzara al-Qāmishlī [カーミシュリーの虐殺に抗議して, 人民議会前で座り込み]” March 15.
- 2004d. “Qam Damawī wa I tiqālāt Wāsī a fī Ḥalab wa ‘ Afrīn [アレppoとアフリーンで血の弾圧と大規模逮捕]” March 16.
- Gunter, Michael M. 1990. *The Kurds in Turkey: A Political Dilemma*. Oxford: Westview Press.
1992. *The Kurds in Iraq: Tragedy and Hope*. New York: St. Martin's Press.

1997. *The Kurds and the Future of Turkey*. Hampshire: Macmillan.
2004. *Historical Dictionary of the Kurds*. Historical Dictionaries of People and Cultures, No. 1, Hanham, Maryland and Oxford: The Scarecrow Press, Inc.
- Haddad, George M. 1971. *Revolution and Military Rule in the Middle East: The Arab States*. Pt. 1: Iraq, Lebanon and Jordan. New York: Robert Speller and Sons, Publishers, Inc.
- Ḥamīdī, Ibrāhīm 2004a. “Sūrīya: Asharāt al-Qutlā wa Jarḥā fī Shaghb Jumhūrī “al-Futuwa” wa “al-Jihād [シリア 「アル=フトウワ」対「アル=ジハード」戦での民衆暴動で数十人が死傷]” *al-Ḥayāt*, March 13.
- 2004b. “Sūrīya: al-Shaghb al-Riyādī Taḥawwal Mawjāʾ Unf Imtaddat ilā Dimashq [シリア スタジアムでの暴動, ダマスカスに暴力が波及]” *al-Ḥayāt*, March 14.
- 2004c. “Dimashq: Infitāḥ li-Ḥall Mushkila al-Maktūmīn wa al-Akrād lā Yaḥtājūn ilā Ḥimāya Amīrikā [ダマスカス マクトウム問題解決に向け門戸開放, クルド人に米国の庇護は不要]” *al-Ḥayāt*, March 19.
- 2004d. “Sūrīya: Iḥāla 22 Muttahaman ilā al-Makama al-Askariya [シリア 22人の容疑者が軍事裁判所に起訴]” *al-Ḥayāt*, April 11.
- Ḥamīdī, Ibrāhīm and Nūr al-Dīn al-A thar 2004. ““ al-Hayāt ” Tajūl ‘ alā Mudun Shamāl Sūrīya: ljrā āt min Tālimāt li-Maḥ Tajammū al-Akrād wa al-Ahālī [『アル=ハヤート』紙, シリア北部の都市を取材 クルド人と地元住民の集会を禁じる通達発令]” *al-Ḥayāt*, March 19.
- Hassanpour, Amir 1992. *Nationalism and Language in Kurdistan, 1918-1985*. San Francisco: Mdellen research University Press.
- al-Ḥawrānī, Akram 2000. *Mudhakkirāt Akram al-Ḥawrānī* [アクラム・ハウラーニー自伝] Vol. 4. Cairo: Maktaba Madbūlī.
- Hilāl, Muḥammad Ṭalab 2001. *Dirāsa ‘an Muḥāfaza al-Jazīra: Min al-Nawāḥī al-Qawmīya wa al-Ijtīmā’īya wa al-Siyāsīya* [アル=ジャズィーラ県に関する研究 民族的, 社会的, 政治的側面から (文献)] Revised edition, Beirut and Bonn: Kāwā li-l-Nashr wa al-Tawzī .
- Hopwood, Derek 1988. *Syria 1945-1986: Politics and Society*. London: Unwin Hyman.
- Human Rights Watch 1996. *Syria: The Silenced Kurds*. Vol. 8, No. 4 (E) New York: Human Rights Watch.
- Hurewitz, J.C. 1969. *Middle Eastern Politics: The Military Dimension*. New York: The Council on Foreign Relations by Frederick A. Peraeger.
- Ismael, Tareq Y. and Jacqueline S. Ismael 1998. *The Communist Movement in Syria and Lebanon*. Gainesville: University Press of Florida.
- Jamīya Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīya 2003. *Taqrīr ‘an Wāqi‘ al-Akrād al-Mujarradīn min al-Jinsīya* [国籍を剥奪されたクルド人の現状に関する報告] Damascus: Jamīya Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīya.
2004. *Taqrīr ‘an Aḥdāth al-Qāmishlī wa Tadā‘iyāt-hā fī Ba‘ḍ al-Mudun al-Sūrīya* [カーミシュリー事件およびシリア諸都市での関連事件に関する報告] Damascus: Jamīya Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīya.
- Keilany, Ziad 1980. “Land Reform in Syria.” *The Middle East Studies*, Vol. 16, No. 3 (October) 209-24.
- Khoury, Philip S. 1987. *Syria and the French Mandate: The Politics of Arab Nationalism 1920-1945*. Princeton: Princeton University Press.
- Kinnane, Derk 1964. *The Kurds and Kurdistan*. London and New York: Oxford University Press.
- Lipset, S. M. and Stein Rokkan eds. 1967. *Party Systems and Voter Alignments*. New York: Free Press.
- Longrigg, Stephen Hemsley 1958. *Syria and Lebanon under French Mandate*. London, New York and Toronto: Oxford University Press.
- al-Maḥmūd, Muḥammad 2003. “Limādhā Ṭuriḥ al-Masāla al-Kurdiya fī Sūrīya al-Ān [シリアのクルド問題はなぜ今提起されたか?]” *al-Quds al-‘Arabī*

- January 7.
al-Majmū'a al-Iḥṣā'īya [統計集] 1961. Damascus: Mudīriya al-Iḥṣā'.
1963. Damascus: Mudīriya al-Iḥṣā'.
2003. Damascus: al-Maktab al-Markazī li-l-Iḥṣā'.
- al-Majmū'a al-Iḥṣā'īya al-Zirā'īya al-Sanawīya* [年次農業統計集] 1975. Damascus: Mudīriya al-Iḥṣā' wa al-Takhtīt.
- Mannā, Haytham 2004. ' *Adīmī al-Jinsīya fī Sūrīya* (*min Ghayr al-Lāji'īn al-Filasṭīniyīn*) シリアにおける国籍剥奪者 (パレスチナ難民を除く)] 3rd edition, Malakoff: al-Lajna al-'Arabiya li-Huqūq al-Insān.
- McDowall, David 1992. *The Kurd: A Nation Denied*. London: Minority Rights Group.
2000. *A Modern History of the Kurds*. 2nd revised and updated edition, London and New York: I.B. Tauris.
- Middle East Watch 1991. *Syria Unmasked: The Suppression of Human Rights by the Asad Regime*. New Haven and London: Yale University Press.
- al-Munāḍil* 1966. " Taqrīr li-Khuṭṭa Inshā' Mazārī Ḥukūmiya fī Muḥāfaza al-Ḥasaka [ハサカ県の政府農場開発計画決定] " No. 11(November) 12-13.
- Nazdar, Mustafā (tr. by Michael Pallis) 1980. " The Kurds in Syria. " In *People Without a Country: The Kurds and Kurdistan*. ed. Gerard Chaliand, 211-219. London: Zed Press.
- Olson, Robert 1995. " Turkey-Syria Relations since the Gulf War: Kurds and Water. " *Middle East Policy* Vol. 5, No. 2(May) 168-193.
2001. *Turkey's Relations with Iran, Syria, Israel, and Russia, 1991-2000: The Kurdish and Islamist Questions*. Costa Mesa: Mazda Publishers, Inc.
- Petran, Tabitha 1972. *Syria*. New York: Praeger Publishers.
- Qaḍāyā al-Khilāf fī al-Ḥizb al-Shuyū'ī al-Sūrī* [シリア共産党における対立問題] 1972. Damascus: Dār Ibn Khaldūn.
- Qānūn Idāra al-Dawla al-'Irāqīya li-l-Marḥala al-Intiqāliya* [暫定期間イラク国家行政法] 2004. Baghdad, May 8(<http://www.cpa-iraq.org/arabic/government/TAL-arabic.html>)
- Rabinovich, Itamar 1972. *Syria under the Ba'th 1963-66: The Army-Party Symbiosis*. Jerusalem: Israel University Press.
- Ramaḍān, Ribhān n.d. " Shā b Mansī wa Dustūr Ghā'ib " Qirā'ā fī al-Mas'āla al-Kurdīya fī Sūrīya [忘れられた人民, 存在しない憲法 シリアにおけるクルド問題の解説] " *Muqārabāt*, No.1(<http://hem.bredband.net/dccls/mo9.htm> ,2003年3月閲覧)
- Rondot, Pierre 1939. " Les Kurdes de Syrie. " *La France Méditerranéenne et Africaine* Vol. 2, Fasc. 1: 81-126.
- Ṣādiq, Mūḥammad 1993. *Ḥiwār ḥawla Sūrīya* [シリアをめぐる対話] Beirut: Dār ' Akkāz.
- Sarūjī, Shīrkū 2004. " Manāṭiq al-Akrād al-Sūrīyīn: al-Dhikrā al-30 li-Zaf' al-Mustawṭinīn al-'Arab [シリアのクルド人地域 「アラブ人移民」の入植30周年] " *al-Nahār*, June 23.
- Seale, Patrick 1965. *The Struggle for Syria: A Study of Post-War Arab Politics, 1945-1958*. London: Oxford University Press.
1988. *Asad of Syria: The Struggle for the Middle East*. London: I.B. Tauris.
- Strohmeier, Martin 2003. *Crucial Images in the Presentation of a Kurdish National Identity: Heroes and Patriots, Traitors and Foes*. Leiden and Boston: Brill.
- Tachau, Frank 1994. *Political Parties of the Middle East and North Africa*. The Greenwood Historical Encyclopedia of the World's Political Parties, Westport: Greenwood.
- al-Ta'dād al-'Āmm li-l-Sukkān* [人口統計] 1960. Damascus: Mudīriya al-Iḥṣā' wa al-Tá dād.
- al-Tammū, Mish al 2003. " al-Qaḍīya al-Kurdīya fī Sūrīyā bayna al-Maskūt ' an-hu wa Sukūniya Anzima al-Taswīgh [シリアにおけるクルド問題, 沈黙と変わることのない正当化の仕組みの間で] " November 16. Qamislo. com (<http://www>.

- qamislo.com/) December 16, 2003.
- Thornberry, Patrick, comp. 1989. *World Directory of Minorities*. Harlow: Essex Longman.
- Torrey, Gordon H. 1975. "Aspects of the Political Elite in Syria." In *Political Elites in the Middle East*. ed. George Lenczowski, 151-161. Washinton, D.C.: American Enterprise Institute.
- al-Turk, Riyād 2001. "Masār al-Dīmuqrāṭīya wa Āfaq-hā fī Sūrīya [シリアにおける民主主義の行方とその地平]" paper read at Muntadā Jamāl al-Atāsī li-l-Ḥiwār al-Dīmuqrāṭī on August 5.
- van Dam, Nikolaos 1979. *The Struggle for Power in Syria: Sectarianism, Regionalism and Tribalism in Politics, 1961-1980*. London: Croom Helm.
- Vanly, Ismet Chéiff 1992. "The Kurds in Syria and Lebanon," In *The Kurds: A Contemporary Overview*. ed. Philip G. Kreyenbroek and Stefan Sperl, 143-170. London and New York: Routledge.
- Yekîti* 2000. "al-Kurd fî al-Suwayd Yuhyûn al-Dhikrâ al-Arbâ in li-Ḥarîq Sînimâ ' Āmūdâ [スウェーデンのクルド人がアームーダ映画館火災40周年を追悼]" No. 67(November) <http://home.c2i.net/yekiti/67.htm>)
- Zengî, Dîawer 2002. "Destpêka Avakirina Komele û Bizavên Rewsenbîrî Yên Kurd li Sûriyê (Rûpel in Winda) [シリアのクルド人組織の創設と知識人の活動 (失われたページ)]" *Nivîs* (<http://www.amude.de/amude/kurdi/nivis/>) No. 15, April 21-May 21.
- (アジア経済研究所地域研究センター, 2004年11月1日 受付, 2005年2月14日レフェリー審査を経て掲載決定)